

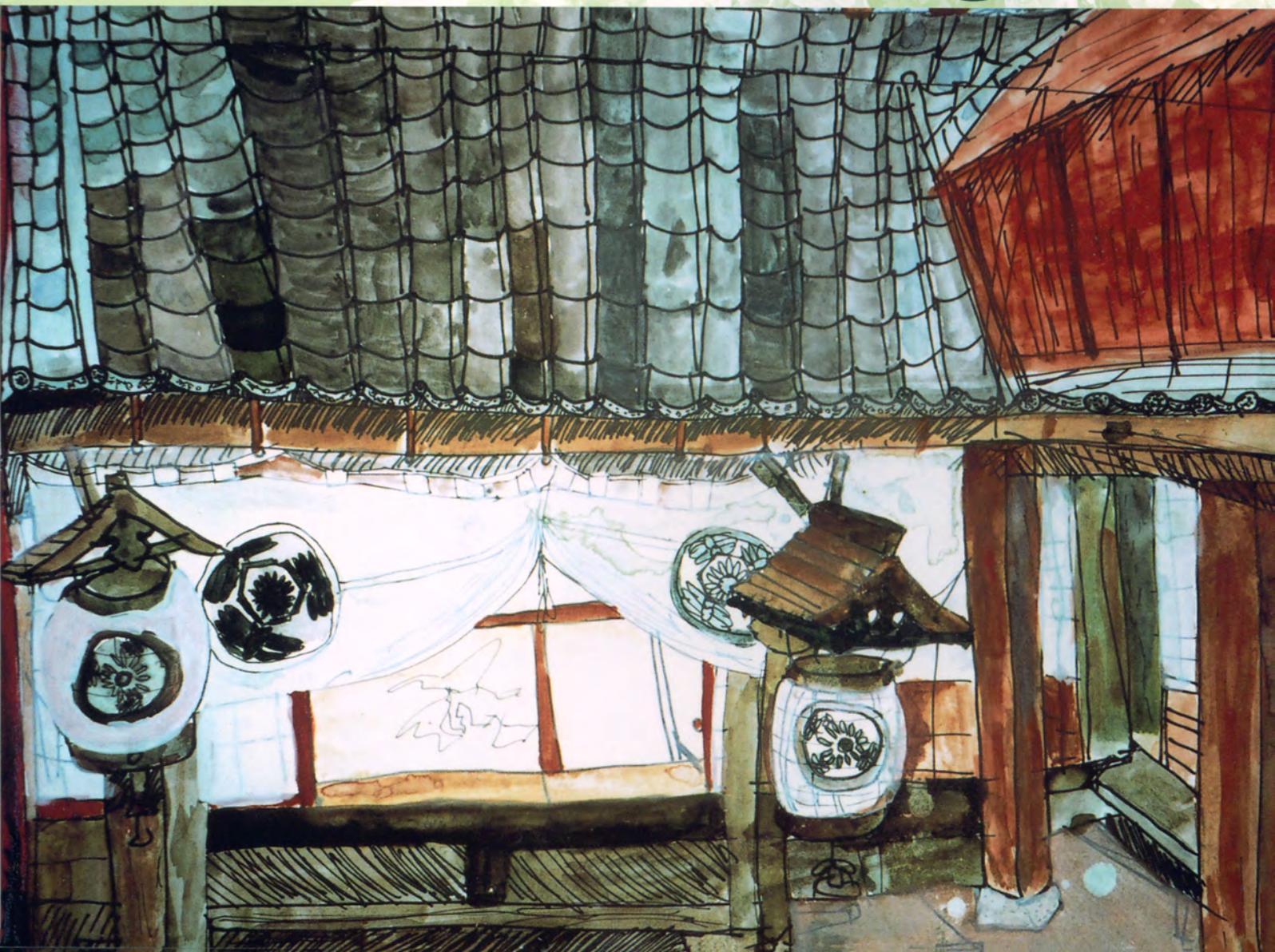
校区のあゆみ

二川

豊橋校区史

22

Futagawa

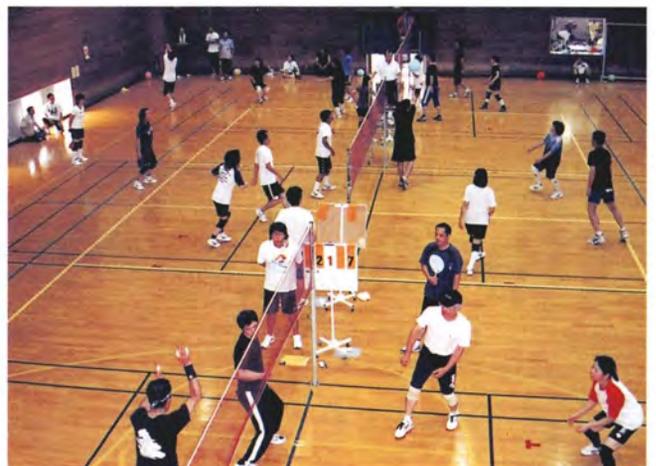






写真撮影：小林春吉氏

校区のあゆみ 二川





東海道五拾三次之内二川 猿ヶ馬場（保永堂版）歌川広重



末広五十三次 二川 五雲亭貞秀



東海道 二川 二代歌川広重



東海道之内 二川（東海道名所風景）豊原国周



東海道五拾三次 二川（狂歌入り）歌川広重



旧二川駅



旧二川駅前の松並木



大岩町字南元屋敷 1952



旧二川小学校



二川宿本陣馬場家 1918



二川町字中町 1959



二川町字新橋町 1959



大岩町字佃 1958



たかはし



二川宿本陣資料館



二川宿本陣まつり



本陣小路



二川駅



豊川用水・健康の道



二川小学校



消防器具庫

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものにと終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
二川校区総代会長

谷 口 幸 市

平成18年度は、豊橋市制施行100周年を迎えました。その記念事業の一つとして校区のあゆみ「二川」を発刊することができました。

他校区には、郷土史あるいは校区史を発刊しているところがありますが、二川には、通史としての校区史はありませんでした。

今回は、これを絶好の機会と捉え、わずか50頁に満たない冊子ではありますが、われら二川の校区史を発刊できたことをうれしく思い、また、格別の意義を感じています。

校区のあゆみ「二川」を読んでいただくことで、自分の生活する町のなりたちや変化していく様子を知り、われらの町を誇りに思い、愛し、育てていく気持ちをさらに高めていくことができればと思います。

また、特に若い人々に、この冊子を読んでもいただき、過去の歴史を学ぶことでこれからの時代をいかに生きていくのかを考えて欲しいと思います。

最後になりましたが、本冊子の発刊については、多くの方々のご協力とご支援をいただきました。改めてお礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

目次

CONTENTS

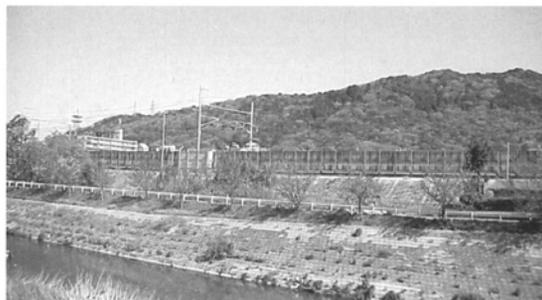
発刊によせて
目次

第1章 自然と環境

1 位置と環境	7
・地形と地質	7
・公園・緑地	7
・交通の要地	7
2 気候	8
3 災害	8
・火災	8
・自然災害	8
4 主な産業	9
・江戸時代の二川	9
・二川の玉糸製糸	9
・内陸型の工業地域	9
・農業の変化	9
5 交通・運輸	10
・宿駅の廃止	10
・鉄道の時代	10
・道路輸送の復活	10
6 職業構成	10
・盛んだった輸送業	10
・玉糸の町から内陸工業地域へ	11
7 計画的につくられた町並み	11
・1町四方の土地割り	11
・貴重な歴史遺産	11

第2章 歴史と生活

1 大昔の二川	12
(1) 旧石器時代	12
(2) 縄文時代	13
(3) 弥生時代	13
(4) 古墳時代	13
2 奈良・平安時代	13
(1) 盛んだった土器や陶器づくり	14
(2) 五畿七道と東海道	14
3 鎌倉・室町時代	14
(1) 鎌倉街道	14
(2) 大岩村	15
(3) 二川村	15
(4) 大脇新田	15
コラム：本郷遺跡	15
4 東海道二川宿のころ（江戸時代）	16
(1) 宿場町の形成	16
(2) 宿の運営と施設	18
5 明治以後	26
(1) 二川町の誕生	26
(2) 蚕糸と醸造	27
コラム：三遠玉糸製造同業組合	28
(3) 太平洋戦争と開拓の歴史	29
6 豊橋市への合併	30
・昭和の大合併	30
・内陸型工業地域	31
・郊外型住宅地	31
・地区市民館第1号	31
7 水と緑と歴史のまち	31
・新しい二川へ	31
・貴重な遺構と二川宿本陣資料館	32
・新橋川の改修など	32
コラム：すみれの花咲く頃	32

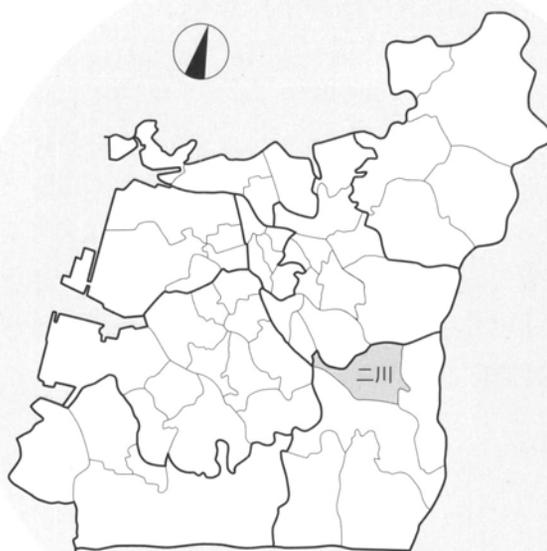


松明山に朝が来て…

第3章 教育と文化

1 学校教育『二川小学校の歴史』	33
(1) 江戸時代	33
(2) 明治時代	33
(3) 大正時代	34
(4) 昭和時代（戦前）	35
(5) 昭和時代（戦後）	37
(6) 創立100年を超えた二川小学校	38
2 史跡と文化財	39
(1) 史跡	39
(2) 神社と寺院	41
(3) 自然	45
(4) 今に伝わる昔話	46
3 人物	47
(1) 二川を開いた人々	47
(2) 小淵志ち	48
(3) 田村憲造と田村善藏	49
4 二川の風景と移り変わり	50
(1) 道路について	50
(2) 二川交番の歴史	50
(3) 二川駅の今昔	50
(4) 映画館について	51
(5) 二川の商店街について	51
編集後記	52
参考文献	52

校区の位置



第1章 自然と環境



島田卓司『二川風景』：豊橋市美術博物館蔵

1 位置と環境

私たちの校区には静岡県湖西市梅田から西に向かう梅田川と、細谷に源を発する落合川とが流れていて、この二つの川の合流点にあることから『二川』と呼ばれるようになった。

地形と地質 二川校区は弓張山地とよばれる赤石山脈の支脈の南端部に位置している。この山地は標高200～300mで秩父古生層からなり、南に向かって低くなっていく。そして、南の太平洋に向かって徐々に高くなる標高20～60mの洪積台地〔天伯原〕とにはさまれている。そして、その最も低いところを東西に梅田川が流れている。この川の両岸には狭いながらも沖積地がある。また、右岸は大雨のときには北の山からの雨水があふれることが多く、古来、カラサワ（空沢・唐沢）と呼ばれてきた。これは「涸れた沢」という意味で、普段は水が流れていないが、降雨時には水が

流れる沢をいう。

梅田川や落合川の低地には水田があった。しかし、左岸の荒田^{あらた}方面は台地のため水が不足する地域であり、主として畑作が行われていた。この水不足を解消するために反茂池・沢渡池をはじめ、多くの溜池が造られてきた。

公園・緑地 校区の北に広がる山林は大半が国有林であり、針葉樹と広葉樹との混合林である。ここから北は「石巻山多摩県立自然公園」に指定されている。また、岩屋山には岩屋観音があり岩屋緑地として親しまれている。そして、二川南校区には「豊橋総合動植物公園」もあって、ここも公園緑地の指定を受けている。

交通の要地 二川は三河（愛知）と遠江（静岡）の境にあって、平地でつながる唯一の地点であり、昔から交通の要衝となっている。

特に、江戸時代になって東海道が梅田川の

北岸につけかえられ、そこに二川宿（及び加宿大岩町）が作られてからは重要性が増した。明治になって東海道は国道2号（後に1号に変更）となり、鉄道も敷かれた。現在も東西交通の大動脈である国道1号をはじめ、JR東海道本線・同新幹線も通っており、交通の要衝としての重要性は変わっていない。

2 気 候

二川の気候は太平洋岸式の気候区に属しており、豊橋市街地のそれと大差はない。

年平均気温は15～15.5℃（最暖月平均26℃・最寒月平均5℃前後）である。降水量は年間1,600mm前後があり、6～8月には平均250mm前後の降水がある。夏は湿度が高くじめじめした日が多く、冬は乾燥した晴天が多い。

そして、冬は北西風、夏は南東風の吹く日が多い。冬の北西風は北側に山地があるため、幾分か防がれている。

3 災 害

火 災 木造家屋が東西に長く連なっている二川の町は、一度火事が起こると大火事になりやすい。古文書に記録があるだけでも以下の表のとおりである。

年 代	西暦	こ と が ら
延宝4	1676	午前2時火元藤三郎より東残らず焼失 被害両宿
享保20	1735	午前8時火元佐平治屋敷地内店借五郎八という者より出火 二川まで焼失 58軒焼失
元文3	1738	焼失家数書留なし
宝暦3	1753	午前8時薬師門前東地借伊之八灰屋より東残らず焼失 両宿焼失（三河国聞書に160軒焼失）
宝暦12	1762	火元平六茶屋町清五郎より西町焼失
安永5	1776	大岩茶屋14軒焼失

寛政元	1789	葛屋火事 二川中町・新橋・東町30軒焼失（41軒ともあり）
寛政5	1793	文六より出火 二川新橋・東町90軒焼失 二川本陣焼失
文化3	1806	二川十七疋・中町・新橋町北側40軒焼失（63軒ともあり） 二川本陣焼失
安政6	1859	二川東町3軒焼失
明治4	1871	二川東町11軒焼失
〃	〃	二川13戸焼失
明治15	1882	松音寺本堂焼失
〃	〃	大岩松前屋火事 20軒焼失
明治17	1884	大岩後藤三吉方失火
明治20	1887	二川加藤治左衛門方失火
明治24	1891	大岩後藤惣左衛門方失火
明治26	1893	大岩村松太郎兵衛方失火
明治33	1900	大岩北山御料林火事
明治39	1906	大岩河合徳三郎方失火
〃	〃	二川杉浦忠蔵方失火
明治40	1907	二川市川屋借家失火
明治41	1908	二川籠田某方失火
明治42	1909	二川菰田瀬平方失火
〃	〃	大岩石川惣平借家失火

自然災害 災害は火災だけではない。自然災害の歴史も、また二川の歴史でもある。以下、おもなものを挙げると次のとおりである。

年 代	西暦	こ と が ら
延宝8	1680	8月6日 大風吹き荒れ家屋倒壊
		14日 大風雨
		9～12月 旱魃
貞享2	1685	3月大地震 山々谷々欠失 家屋倒壊
		5月上旬～6月下旬 大旱魃
		9月20日 大風雨
貞享5	1688	7月22日 大風
元禄6	1693	7月6日 大風雨 洪水
		11月22日 地震
元禄11	1698	4月下旬～5月下旬 雨降り

		続く 山々崩壊
		6月25日 夕立落雷 人多く死ぬ
		11月27日 大雨 洪水
宝永4	1707	10月4日 大地震 大津波 山々崩壊 人馬多く死ぬ
宝永5	1708	春 地震続く 高潮
		7月2日 大風雨 洪水
正徳元	1711	7月28日 8月9・23日 9月28日・10月18日 大風
正徳2	1712	夏 旱魃
正徳3	1713	7月4日 大風
		8月12日 大風雨 洪水
正徳4	1714	7月9日 大風雨 洪水 8月8日 大風雨
享保元	1716	7月26日 大風 家屋倒壊
享保15	1730	8月31日 高潮
天明3	1783	7月 地震
寛政元	1789	6月19日 大風雨 大洪水 同日 大霰降る
寛政4	1792	5月8日 大洪水 7月13日 大風雨 高波 7月25日 津波
天保5	1835	飢饉
天保7	1836	飢饉
嘉永3	1850	8月25日～9月6日 津波 4月～7月中旬 大旱魃
安政元	1854	7月21日 大風雨 大洪水 11月4日 大地震 津波7ヶ月続く
明治24	1892	10月28日 濃尾大地震 7月24・25日 強風 洪水 高潮 二川地方冠水
明治25	1892	8月7～10日 大雨 梅田川
明治43	1910	破堤 二川地方氾濫
昭和49	1974	7月7日 台風8号 二川地方冠水
平成16	2004	二川地区で竜巻発生

4 主な産業

江戸時代の二川 宿場として作られた二川では、旅籠や人馬継ぎ立てを職業としている者はいても、大半は農家であった。吉田藩でも江戸時代の初めから領内の各地で新田の開発を行い、耕地の拡大に力を注いだ。二川周辺でも元和7年(1621)には中原新田〔現中原町・谷川校区〕が開発されている。これは江戸時代、旧渥美郡内で開発された最初の新田であるとされる。また、大脇新田〔現大脇町〕も貞享年間(1684～1688)以前の開発であるとされている。

江戸時代の製造業としては享保19年(1734)の村指出帳まさだしちように造酒屋2軒とあり、醸造業があったことがわかる。

二川の玉糸製糸 桑畑や養蚕を行う農家が増えるとともに、製糸業も興り、小淵志ちが糸徳製糸工場を設立した明治18年頃から次第に発達した。また、『養蚕伝習所』が二川〔当時は大川村〕と和地村〔現田原市〕に設置され、20名ずつの伝習生に養蚕の技術を教えたことも大きな支えとなった。しかし、二川の製糸業も昭和4年をピークに、次第に衰退した。

また、幕末から明治にかけて発達し、二川を代表する産業となったものに味噌・醤油をつくる醸造業もある。

内陸型の工業地域 戦中・戦後はこれといった産業もなかった。しかし、昭和30年4月の豊橋市への合併後は、内陸型工業の適地として注目されるようになった。また、昭和38年に豊橋市を含む東三河が『工業整備特別地域』に指定されると工場の進出が多くなった。特に、昭和35年以後、日東電工・神鋼電機など10数社が進出してきて、国道1号沿いに内陸型の工業地域が形成された。

農業の変化 農業については梅田・落合両川沿いの低地を除くと、ほとんどが水不足の台

地が占めている。そのうえ、土地も痩せていて酸性度も強く、畑作はできて高い収穫量は望めない耕地であった。そこでは、主食を確保するための甘藷や麦などが栽培されていた。

しかし、昭和43年には待望の豊川用水が完成した。灌漑設備が整備されると農業は大きく変わり、西瓜・白菜などの商品作物の作付けが増えた。また、大規模な機械化も進んだことから、農業出荷額も増えている。

5 交通・運輸

宿駅の廃止 明治新政府は交通・運輸の近代化のため旧来の宿駅制度を廃止した。明治4年4月、これまでの問屋（継ぎ立て）業務を新設した陸運会社に引き継がせた。この会社は翌5年8月に二川郵便局が設置されるまで、民部省から郵便物の取り扱いをも委託されていた。新しい陸運会社はこれまでの人馬・駕籠による輸送のほか、車両による輸送や継通しの輸送も行うようになった。

明治5年6月、全国の陸運会社は東京の日本橋に設立された陸運会社に統合された。しかし、この会社も明治8年5月31日に解散を命じられ、江戸時代から続いていた『宿駅』としての業務が終わった。

明治2年、これまで道中奉行の支配下にあった街道の管理が府藩県に委任された。しかし、明治6年8月に「道路改修規則」が大蔵省から発令された。これは、全国の道路を一等・二等・三等に区分し、道路の保全を図ろうとするものであった。さらに、翌年6月8日、新しく国道・県道・里道の区分（太政官布告）を設け、それぞれを一等～三等に区分するものであった。この結果、二川を通る東海道は国道の一等に指定された。その後、明治11年の天皇東幸に際し、高師・大岩間の急坂を避けるため岩屋観音南を迂回する新道に付け替えられている。また、二川を通る県道

として新所街道があり、入出・新居方面へ通じていた。

二川宿では慶応2年（1866）に荷車の使用が許可された。これによって輸送の手段は馬や人足から荷車や人力車へと変わった。明治9年には荷車（大六車）が二川村で43両・大岩村で24両、人力車は二川村で50両・大岩村で51両が登録されている。これは豊橋村の荷車31両・人力車15両と比べて、圧倒的に多いことがわかる。

鉄道の時代 明治新政府は道路整備とともに鉄道の建設も重要な政策としてあげていた。なかでも、東海道線はわが国の最重要幹線鉄道とされた。明治21年8月1日に大府・浜松間が開通し、翌22年7月1日に全線が開通した。二川駅はこれより8年遅れた明治29年4月に、町の中心部から西に離れた大岩村元屋敷に設置された。また、昭和38年には東海道新幹線が在来線と並行して建設されている。

道路輸送の復活 国道2号（旧東海道）は国道1号となった。そして、これが梅田川の南に付け替えられた。以後旧道となった東海道は筋違橋の東で国道1号と合流することになった。

自動車が普及し、全国の道路網が整備されると貨物の中心は鉄道からトラックに移った。このことで、国道1号に沿う二川は工場適地として再び脚光を浴びることとなった。

また、昭和47年に二川駅前から北裏・大脇を通る二川バイパス（主要地方道豊橋湖西線）が開通した。このバイパスの北側には住宅用地が開発され、北側の山麓に町域は広がった。

6 職業構成

盛んだった輸送業 元治元年（1864）、二川宿の職業構成は総家数336戸のうち農業261・商業25・旅籠31・茶屋6・神主1・床場1・医師1・不明1（紅林武衛氏蔵：東海道二川宿軒並図面書上帳）となっている。77%以上の

人が農業の合間に人馬の継ぎ立てを行っていたことがわかる。

明治4年の駅制廃止は旅籠および商家の一部に転業を促した。その結果、明治6年には旅籠（旅館業）が半減し、商業や新しい職種が増えている。（愛知県第15大区2小区二川村各業表）また、同じ年の4月に農家29戸が人力車曳の許可を申請しており、人馬継ぎ立てに代わる新しい職業として注目されていることがわかる。

玉糸の町から内陸工業地域へ 明治後半からの製糸業の発展については9ページで述べたとおりである。玉糸製糸に従事した工員数は1,600人（昭和4年）と報告されており、その大半は女子の工員であった。

その後の職業別構成を知る資料はなく、実態は把握できない。わずかに戦後、旧街道沿い229戸についての調査報告があるが、調査範囲は明確に示されていない。しかし、これによれば、

農	業	56戸	(16.6%)
商業	・サービス業	132戸	(39.0%)
製造業	・工業	26戸	(7.7%)
給与所得者		112戸	(33.0%)
無職	・その他	13戸	(3.8%)

となっている。

これに対して、昭和58年度に行われた旧宿場内で街道沿い256世帯の職業調査結果をみると、

農	業	12戸	(4.7%)
商業	・サービス業	116戸	(45.3%)
製造業	・工業	22戸	(8.6%)
給与所得者		106戸	(41.4%)

となっている。

昭和36年の調査に比べ農業が大きく減少し、商業や給与所得者の比率が高くなっている。この変化は内陸型の工業用地や住宅用地の開発と時期が重なっている。

7 計画的につくられた町並み

1町四方の土地割り 二川宿がつくられたのは正保元年（1644）であるとされ、大岩・二川両村は元屋敷から現在地に移転している。このときに家並み（土地割り）が計画されていると推定される。宿場東端の見付土居を起点として、

半町	北側	在郷道
1町半		妙泉寺参道
2町半		八幡社参道
3町半		松音寺参道（街道屈折部）
4町		新橋町・中町の字界
6町半		二川・大岩村界（街道屈折部）
8町	南側	作場道
9町半		林光院参道
10町		神明社参道
11町半	南側	作場道
12町半		加宿西端

と、規則正しい配置となっていることから裏付けられよう。

すなわち、寺社参道や在郷道・作場道などの街道と直交する生活道路、村・字界が1町（約109m）を単位として規則的に配置されていることがわかる。さらに、南北の方向についてみると、新橋町より西にある宅地の奥行きは28間に統一されている。これは、街道の中心線から半町（30間・約54.5m）の線に合わせたものであろうと考えられる。

貴重な歴史遺産 二川には本陣や清明屋・駒屋など、目に見える遺構が多い。これらについては一定の保存策も講じられている。それとともに、江戸時代における計画的な土地割り（都市計画）の痕跡は全国的にも貴重な遺構である。目に見える景観の保存とともに、目に見えない歴史的な遺産の保護・保存も大切なことであろう。

第2章 歴史と生活

二川にはどのような歴史があり、二川に住む人々はどのような暮らしをしてきたのであろうか。まず、旧二川町が豊橋市に合併するとき、愛知県に提出した申請書をみてみよう。難解な文ではあるが、原文のまま引用する。

二川町は愛知県の東南端渥美郡の東部に位し、面積42.65平方料で南は一带太平洋に面し北は赤石山脈を以て豊橋市に西は豊橋市及び高豊村に接し東は静岡県浜名郡に接している、地勢は概ね平坦であるが北部に山地を背ひ西部には廣漠たる丘陵あり所謂天白原の一部となっており主なる河川として梅田川は東西にその支流たる落合川は南北に貫流し氣候は極めて温暖な地である、町の沿革としては、明治11年12月郡を以て行政の区劃とするに及んで各町村に戸長が置かれ旧村部落を合併し大岩村、谷川村、二川村、五並村と4村が新しい村として誕生した明治15年6月五並村は6村に分裂明治22年10月市町村制実施と共に小澤村、細谷村、大川町〔大岩、二川、谷川村が合併〕となり明治30年2月大川町の一部が分裂して谷川村が出来たが明治39年7月町村合併が断行され大川町、谷川村、細谷村、小澤村を合せて茲に二川町が誕生した譯である。由来この地は五十三次の一なる二川宿であつた爲め本陣、脇本陣と共に二川中町附近は宿場となつており農商業を中心とした地であつたが明治30年頃より製糸業が盛んになり味噌、溜醸造業と共に工業をも併せた経済的にも恵まれた地となつたが大正7・8年の不況と昭和8・9年の物價暴落により製糸業は大半破産し現在は味噌、溜業、製茶、製糸業の一部と甘藷、澱粉等が町の主要産業となつている交通の面は

東海道の要路にある関係上その便はよく東海道本線、二俣線は共に街に添ひ貫通しバスも国鉄バス、遠電バス等があり細谷線、入出線、三河小松原線等の分岐点となつており人口は14,000余り観光地は岩屋山、普門寺、東観音寺等がある。

市町村の廃置分合申請書 昭和29年

これで、明治以後の二川のおおよそがわかった。しかし、この申請書には江戸時代より前のようすについては、何も書かれていない。

それでは、二川の歴史を大昔から順にふりかえてみることにしよう。

1 大昔の二川

(1) 旧石器時代

最古の人類は約400万年前にアフリカ大陸で誕生したとされる。その人類が誕生してから、土器を作り始めるまでが「旧石器時代」である。

日本列島は約200万年前にほぼその形ができ、氷期（氷河期）にはユーラシア大陸と陸続きになった。この時期にはマンモスやナウマンゾウ、オオツノジカなどが大陸から日本列島へやってきている。そうした動物を求めて人々も大陸から移動してきたと考えられる。**文化のあけぼの** 彼らは石を割って形を整えた斧形などの打製石器を使い、大型ほ乳類に立ちむかった。そして、それらの獲物を食料として生活していた。旧石器時代の遺跡は、この二川はもちろん豊橋市内からみつからない。しかし、豊橋周辺では加生沢遺跡〔新城市〕や駒場遺跡〔豊川市〕などでこの時代の石器が発見されている。

(2) 縄文時代

人々が土器を作るようになってから、本格的な農業が行われるまでが「縄文時代」であり、縄目の文様を特徴とする土器が使われていた時代をさす。また、抜歯や土偶づくり、死者の埋葬方法などに縄文時代特有の習俗をみることができる。このころには気候が温暖になり、木の実や小動物、魚介類など、食料も豊富になった。そのため人々は移動生活をやめ、定住生活をするようになった。

嵩山蛇穴遺跡 縄文時代のごく初期には、嵩山蛇穴遺跡（昭33指定国史跡）にみられるように洞窟や岩陰に住んでいた。やがて彼らは地面を掘り下げ、木と茅で作った竪穴住居に住むようになった。狩猟や採取によって得た食料は土器で煮炊きして食べていた。また、食べかすやこわれた土器などはまとめて一定の場所に捨てられ、貝塚とよばれる遺跡となった。二川でも人々のくらしがはじめられたようで、少ないながら本郷遺跡からこのころの遺物が出土している。

(3) 弥生時代

稲作のはじまり この時代は縄文時代の狩りや採集の社会から稲作など農業を中心とした社会へと移り、古墳が造られるようになるまでの期間を「弥生時代」と呼んでいる。東京都文京区弥生町の遺跡から発見された土器に因んでその名がつけられた。

稲作は鉄や青銅などの金属製品とともに、大陸から伝わってきた。人々は共同で水田をひらき、近くにムラをつくって生活するようになった。農耕などによってうまれた余剰品の発生は、ムラのなかでの身分の差をもたらした。また、水田の権利をめぐるムラとムラとが争うことも起こってきた。この争いは小さなクニを生み、クニどうしの争いはさらに大きなクニにまとめられていった。

瓜郷遺跡 この地方で弥生時代の遺跡として重要なものは瓜郷遺跡であろう。この遺跡は弥生時代中期から古墳時代初期までの農業集落の遺跡であり、昭和28年（1953）に国の史跡に指定されている。

(4) 古墳時代

土を高く盛って造られた有力者の墓（古墳）により、社会のさまざまな制度や秩序が表現された時期が「古墳時代」である。古墳には前方後円墳をはじめ、前方後方墳、円墳、方墳などがあり、種類や大きさが豪族の出自や序列を反映していると考えられている。また、古墳を築造する技術は大規模な水路工事などにも生かされた。このように、朝鮮半島を経て伝えられたさまざまな文物や技術は、そのころの人々の暮らしを飛躍的に発展させていった。**二川の夜明け** 二川校区やその周辺にも、6世紀から7世紀にかけて造られた二川古墳群や大岩古墳群など多くの古墳がある。これは、渥美半島や豊川河口に住んでいた人々が梅田川にそって移住し、二川の地で生活していた支配者の墓と考えられている。これらのうちで中心となるのは、大岩古墳群の火打坂1号墳で、全長約20m、ホタテ貝型の前方後円墳であった。また、チャンチャカ山支群は、昭和38年（1963）の調査ですべて円墳だったことがわかった。また、ここからは多数の土器も発見されている。

2 奈良・平安時代

平城京と呼ばれた奈良や平安京と呼ばれた京都に都がおかれていた時代を「奈良時代」・「平安時代」という。それより少し前の「飛鳥時代」には本格的な仏教寺院が建立され、仏教と結びついた政治が行われるようになる。律令国家の成立は、新たな地方支配をすすめた。地方には国が置かれ、その下に

郡や里が置かれた。国には役所となる国府や国分寺・国分尼寺が、郡には郡衙や寺院が造営されている。

奈良時代の二川は渥美6郷のうち、高蘆郡に属していたと思われる。(和名類聚抄) また、平安時代には大脇荘や岩根荘という私称荘園の名もみられる。

(1) 盛んだった土器や陶器づくり

二川古窯址 このころの二川は土器や陶器の生産が盛んであった。古墳時代にも東細谷から二川にかけての一里山古窯址群や東籠田古窯で須恵器が生産されている。平安時代になると、二川窯と呼ばれる90基にもおよぶ窯が築かれた。ここでは灰釉陶器や緑釉陶器など、釉薬のかかった陶器が生産されている。このことについて、天曆11年(957)に書かれたと思われる『いほぬし』という紀行文には、

たかし山にすゑつきつくる所とききて

ただならぬ 高師の山の すゑつくり

物思ひをそ やくとすと聞く

と詠まれており、窯業が盛んであったことがわかる。しかし、このころの暮らしがどうなっているかは、はっきりしていない。



東郷内古窯出土品(二川小学校蔵)

(2) 五畿七道と東海道

都と各国の国府との連絡を円滑にするため、交通路の整備が全国的な規模で行われた。五畿七道とは都の周辺を五つ(五畿)に、地方を七つ(七道)に分けたもので、この三河国は『東海道』に編入されていた。この東海道は尾張の国府〔稲沢市〕から三河の国府〔豊川市〕に到り、さらに遠江の国府〔磐田市〕をつないでいる。したがって、古代の東海道を

通る駅路は、二川附近を通過しているものと思われるが、その記録はみつからない。

3 鎌倉・室町時代

武士の世の中 鎌倉や室町〔京都〕に幕府が置かれ、武士による政治が行われた時代を「鎌倉時代」・「室町時代」と呼んで、まとめて「中世」ともいう。これまでの貴族による律令体制から武士による封建的な政治へと変わった。領地を与えられた武士はその領地に住んで自分の土地やそこに暮らす農民の支配をすすめた。また、彼らの活躍は陸上交通だけでなく、海上交通をも発達させて陶器などの製品が全国的に流通するようになった。

鎌倉時代の二川についても、ほとんど知る手がかりはない。ただ、普門寺に伝わる文書によれば、同寺の領地であったらしいことはわかる。

また、室町時代から戦国時代にかけて六田川(現梅田川)の流域は、地侍である畔田遠江守が領主となり、今川氏の支配をうけていた。その後は、牧野氏・今川氏・戸田氏・松平氏など、戦国武将の抗争の場となった。

(1) 鎌倉街道

東海道の移り変わり 平安時代の東海道は国府〔豊川市〕から渡津〔小坂井町〕を経て飽海・高師を通過して浜名橋へと向かっていたと思われる。鎌倉に幕府が開かれると、鎌倉と京都との往来が多くなった。この往来に利用された道がいわゆる鎌倉街道であるが、『鎌倉街道』は固有名詞ではない。そのため、全国各地に同名の古道が残されている。京都と鎌倉の往復の様子について書かれた日記や紀行文には大岩や二川の地を通過したことが書かれているものもあり、およそその経路が推定できる。それは次の三種に大別される。

ア 渡津⇒豊川渡河⇒高師山⇒橋本

イ 豊川宿⇒豊川渡河⇒高師山⇒橋本

ウ 豊川宿⇒豊川渡河⇒本坂峠⇒三ヶ日

ア又はイのコースをとれば当然二川を通過することになる。

例えば、貞応2年(1223)の『海道記』には、豊川宿⇒峯野ヶ原⇒高師山⇒火敵坂⇒堺川⇒橋本宿というコースで下向したことが書かれている。このなかの「火敵坂」とは、現在の火打坂のこととされている。このことから、いわゆる鎌倉街道が現在の大岩町地内を通過していることが推察できる。

(2) 大岩村

正応年間(1288～1293)、岩屋山の麓に数軒の家があり、ここは岩根の庄と呼ばれていた。やがて、この庄の住民は梅田川の河岸段丘上〔現大岩町本郷附近〕に移って大岩村をつくった。そして、この大岩村は天正11年(1583)ころの街道替えによって本郷から元屋敷へ移ったと古記録は伝えている。

本村古時文武2年岩根庄大岩村ト称シ岩屋山麓ニ居村ス、保延元^乙年字本郷へ移村ノ時大岩村ト称ス、亦天正11^癸年字元屋敷へ移村致シ、尚正保元^甲年字東郷内・西郷内エ引越、二川駅ト連属シテ大岩町ト称シ、亦明治4年大岩村ト称ス
渥美郡大岩村村誌取調書

(3) 二川村

二川村の本郷は、現在の三弥町地内にあったとされている。これは、建仁元年(1201)高師村から分かれた細谷村の出郷であり、後

に二川村の本郷となった。そして、この出郷は落合川の沖積地に水田が開発されることで、一村として誕生したと考えられている。

この二川村も天正13年(1585)ころに本郷から元屋敷といわれる場所へ移っている。

本村古時渥美郡、郷莊不詳、往古本村字元屋敷ニ在リ、同郡大岩村ト本村トノ間ニ拾町余アリ、御用御通行ノ際人馬継立方不弁ニ付、正保元^甲年両村共同時ニ引移リ連担シテ二川宿ト称シ、明治5^壬年廢藩置県ノ際額田県ニ於テ管轄内宿々ヲ何レモ村ト呼ビ、明治9^丙年地租御改正ノ際同郡大脇新田ヲ併セテ一村トシ本称ヲ用ウ

渥美郡二川村地誌編輯

これによれば、廢藩置県により二川宿を二川村と呼ぶようになった。さらには大脇新田を併せ、新しい二川村ができていることがわかる。

(4) 大脇新田

大脇新田は、梅田川右岸に位置する村で、江戸時代から明治11年(1878)までは大脇新田と呼ばれていた。この大脇新田は雲谷村からわかれた村で、二川・大岩と異なり三河国渥美郡に属し、吉田藩の支配を受けていた。

新田の開発は貞享年間(1684～1688)以前とされており村高は23石余であった。安政5年(1858)の記録によれば家数が7戸、人数は31人であった。また、村の地内には吉田藩の御用林もあり、藩の山守が置かれていた。

その後、大脇は明治11年に二川との合併が認められ、二川村の一部となるまで続いた。

本郷遺跡 縄文時代の小規模な遺跡としての本郷遺跡の存在は、従来から知られていました。しかし、平成12年からの発掘調査によって、中世にあった大規模な集落址が発見されました。まさに江戸時代になって消えた村が、再びその姿をあらわしたのです。中世の遺跡は近世(江戸時代)まで続いているものも多いのですが、この本郷遺跡は近世には消滅した村の遺跡なのです。そのため、中世のみの土器や陶器が限定でき、それらの種類や産地などを研究するうえで、全国でも重要な遺跡のひとつだとされています。



本郷遺跡から出土した銅銭

4 東海道二川宿のころー江戸時代ー

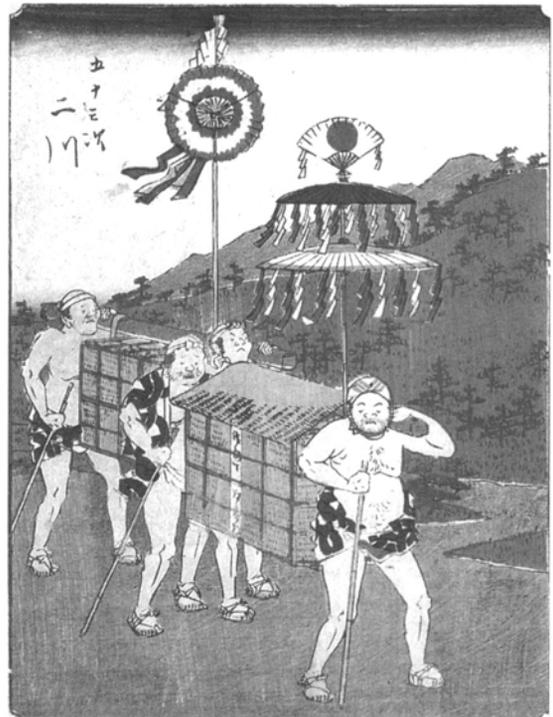
江戸時代に旅立つ前に

二川は三河と遠州を結ぶ地域として古来より東西交通の要衝であった。現在、交通の大動脈とも言える国道1号線が南側を貫き、湖西方面に到るバイパスが北の山裾を走っている。道路の利便の良さが企業や店舗を招来し、居住地を田畑や里山の森林へと拡張してきた。現代風な店舗やマンション、洋風建築が増えている。そのような町の変化の中で、旧東海道沿いは落ち着いた雰囲気を維持している。幅の狭い道に軒を並べる家屋や店舗。格子戸。奥行き長い土地割。2か所の鍵の手型の屈曲（ますがた 枅形）。常夜灯。本陣、はたごや 旅籠屋の遺構。神社、寺院。一里塚跡。世古道。これらの町並みの特徴は、今更言うまでもなく宿場町であった頃の景観を伝えるものだ。その頃の二川は、人々を留め、交流し、文化を生み出す土地であった。今、私たちが将来の町と暮らしについて考えようとするとき、幾世紀かを遡ってみるのも意味のないことではないだろう。それでは、江戸時代の二川へと旅立つことにしよう。

(1) 宿場町の形成

家康の東海道整備政策

関ヶ原の合戦で覇権を握った徳川家康は、五街道（東海道、なかせんどう 中山道、日光道中、奥州道、甲州道）の中でもとりわけ江戸と上方を結ぶ基幹路となる東海道を真っ先に整備した。慶長6年（1601）、家康は、てんまさだめがき 伝馬定書と伝馬朱印状を東海道の各宿場に下し、体系的な宿駅制度を目指した。宿駅制度とはしゆくつ 宿継ぎによる輸送と宿泊施設のことだ。各宿場では100人（最初は36人）の人足と100疋（最初は36疋）の馬の用意が課され、幕府の公用旅行者や荷物、文書などを運ぶために次の宿駅までの人



五十三次二川（人物東海道） 歌川広重

馬の提供が義務付けられた。そして、その人馬割付わりつけや公用飛脚の業務を行うために問屋場が置かれた。宿の住民は、人馬を常備する代償として一定の地子（屋敷地に対する宅地税。原則として銭納）が免除され、駄賃稼ぎや旅行者用の休泊施設の常設が認められた。宿場には公用旅行者や大名が宿泊・休憩するための本陣が設けられ、さらには一般旅行者のための旅籠屋が立ち並ぶようになった。しだいに安定した政治体制が確立すると、東海道は公家・大名から庶民にいたるまで、多くの人々の往来で賑わいをみせるようになった。

二川宿加宿大岩町の成立

二川宿は家康のかぶ 下付した伝馬朱印状に従って、慶長6年（1601）に設置された宿と言われている。開宿当初から一続きの宿場であったのではなく、40年あまりの間、12町（約1.3km）ほど離れた二川村と大岩村が各元屋敷もとやしきの地で1宿分の継立つぎたてを行っていた。当時天領（幕府領）であった二川と大岩は、寛

永9年(1632)、吉田藩の管轄下に置かれたが、距離を隔てた2村による継立は不便であり、参勤交代等による交通量の増大のために負担が大きくなっていった。寛永20年(1643)、領主水野忠善のとき、幕府大目付井上筑後守政重は、人馬継立による両村の疲弊を理由に、両村を幕府領に移管することを進言した。この結果、両村は再び天領となり、代官鈴木八右衛門の支配下に置かれて、翌正保元年(1644)、両村は移転し、带状の一続きの宿場町、二川宿・加宿大岩町を形成した。以後二川宿は、代官の支配を受けることになった。

この移転の際、二川の一部が従来の大岩町域の中に入ったために、二川が17疋を余分に負担したので、二川が67疋、大岩が33疋の伝馬を負担することになった。この17疋分の負担に当たる区画を十七疋町と呼んだ。移転前の旧境界線の区域で50疋ずつ出すという名目は、二川が大岩を対等な村として立てるための方策であり、二川とは別に大岩にも問屋場を保持していたことは、大岩村が自立を踏まえた上で宿場の運営に協力していた証であるという見方もある。

二川村と大岩村の移転



(二川宿本陣資料館)

町並みの特徴

江戸時代の東海道の宿場は、前代から宿であったところが多いが、宿と宿との距離が大きく離れている場合などは新しく宿場を設置したり、まったく集落のない場所に住民を集めて宿場を設けたりしたところもあった。現在の町並みにつながる二川宿は、前述のよう

に2つの村が互いに寄り合うようにして移転して作られた新しい宿場である。そのために街区割りがきわめて計画的に行われたと推測されている。(街区割りは11ページを参照)

旧東海道において、二川のように当初の街区割りの痕跡を留めている宿場はほとんどない。道路に注目してみよう。車社会の今日、旧街道の狭さがたびたび話題に上るが、それがほぼ昔のままの道幅(約4間≒7.3メートル)を保持しているというのは貴重なことだとも言える。また、新道や裏町の道ができていくのは自然の進展だが、江戸時代からの在郷道・作場道(耕作地へ通じる道)・参詣道が私たちの日常生活の道として残っているのはたいへん興味深いことではないか。近世宿場町としての二川の景観は時代の推移と世代交代の過程で急速に薄れてきてはいるものの、この地区で暮らす私たちの町の骨格そのものに歴史的意義があるということを再認識したい。

さて、現在の地に二川宿を創り出そうとしたとき、先人はどんな困難に見舞われたか。二川宿のあった弓張山系南麓の土地は、古来より山地の雨水が傾斜に添って南側の梅田川に流れ込む、その間に位置しており、表土が浸食されて荒れていた。この土地が唐沢と呼ばれていたことにも荒れ地ぶりが示されている。したがって、二川宿にとっては水害の克服が欠かせなかった。寛文元年(1661)、二川に新橋川、大岩に宮川(神明川)を通して雨水と生活排水を梅田川へと流した。このほか3ヵ所の水路と旧街道の両側に側溝がつけられ、補助的役割を果たしていたが、十分な対策にはならなかったようだ。社寺がすべて街道の町並みの北側にあるのは、梅田川に近いほど土地が低くなり、豪雨時には浸水しやすかったためだと言われている。二川・大岩地区は近年でも豪雨時に浸水した地域があり、

水害対策は江戸時代以来の課題と言えよう。

二川宿の賑わい

武士や公家、庶民等さまざまな人が東海道を通り、二川宿で足を休めたり宿泊したりした。その中には大名行列のような大通行もあった。

天保3年（1832）の11月6日の琉球使節団が宿泊したときには、臨時の宿泊所を設けて64軒に宿割したが、長持250棹を納める場所がないために苦労したようだ。総勢2650人余りであったと言う。



『琉球大行列記』寛政2年（1790）刊

さらに幕末の文久3年（1863）2月と慶応元年（1865）5月の2回、将軍徳川家茂が小休をしている。文久3年の記録によると、およそ7000人が通行したらしい。二川宿から人や物が溢れ出すほどの混雑ぶりであったろう。

(2) 宿の運営と施設

二川宿の町と施設

問屋場は二川と大岩の両方に置かれていたが、本陣、脇本陣、旅籠屋は二川にあった。加宿である大岩では旅人の小休のための立場茶屋はあるものの、宿泊施設を置くことは許されていなかった。宿場の中心は二川中町で、旅籠屋の大部分がここに集まり、高札場も二川中町の西はずれの南側にあった。賑わいの

ある中心部からはずれに行くに従って農家も多くなり、寂しくなっていったようだ。

問屋場と伝馬役

街道の宿場と聞くと、まずは行き交う旅人たちを泊める町の姿が浮かぶのではないだろうか。しかし、宿場にとって最優先の役割は人馬による旅人や荷物の輸送である。とりわけ幕府が宿場に求める役割は公用荷物の継立や御用旅宿の手配にあった。そのような人馬の継立をはじめとする業務、さらには商品物資の輸送等を取り扱った施設が問屋場である。二川宿大岩加宿では、寛政年間（1789-1801）から文化年間（1804-18）の一時期を除いて、二川中町に東問屋場、大岩中町に西問屋場が置かれていた。

問屋場には、問屋・年寄・帳付・人馬指等の宿役人が詰め、継立の業務を行っていた。

問屋	宿場に関する一切の事務の管理
年寄	問屋の補佐役
帳付	書記
馬指	伝馬を割り当てる役
人足指	人足を割り当てる役

二川宿の問屋場は、天保14年（1843）には問屋4人・年寄5人・帳付4人・馬指4人がいて、東西の問屋場が2日ずつ交代で勤めた。そして、問屋と年寄各1人、帳付と馬指各2人は毎日必ず問屋場に勤務した。ただし、身分の高い人や多人数の通行の際は、役人全員が出勤してこれにあたった。宿役人である問屋は業務上責任が重かったのも、村役人である名主が兼務することが多く、代々世襲の場合もあった。

二川宿でも、東問屋場は本陣経営を兼ねた後藤五左衛門が享保20年（1735）まで世襲し、西問屋場は後藤七郎左衛門が天保9年（1838）まで世襲した。

【人馬継立の種類と運送方法】

無料

御朱印 人馬使用を将軍が許可した伝馬朱印のあるもの

御証文 老中・京都所司代・大坂町奉行等の発行するもの

無賃 道中奉行の触書を伝達するような場合

御定賃 = 公定賃 公用通行者

雇上 = 双方で値を決める (相対賃)

* 御定賃の2倍程度の料金

庶民の利用

公用で規定の人馬数を超過した場合

重量によって定められた駄賃(料金)



本馬 40貫(約150kg)まで荷物を積むことができる。



乗掛 人1人が乗り、荷物20貫(約75kg)まで乗せることができる。



軽尻 人1人と荷物5貫(約20kg)まで乗せることができる。荷物だけなら20貫まで。



人足 1人5貫までの荷物を運んだ。

飛脚

継飛脚

幕府公用。老中・京都所司代・大坂城代・駿府城代・勘定奉行など幕府要職が利用できた。

歩行役が昼夜3人ずつ勤めた。隣宿まで文書を運び、その代償は宿場への給米によった。

江戸・大坂間を4、5日で運んだ。

三度飛脚

大坂・二条・駿府城に詰める役人専用。

その他 大名飛脚、七里飛脚、町飛脚等が

ある。

駕籠

駕籠は、市街地に行く「町駕籠」または「辻駕籠」、旅行者用の「山駕籠」または「道中駕籠」と分けて呼ばれた。江戸時代には駕籠に乗るのは贅沢とされていたが、中に乗っている者が見えないために警戒された乗り物でもあったらしく、町駕籠についての「御法度」(禁止)の記録(寛文5年、1665)が残っている。

飛脚が盗賊に襲われる

文久3年(1863)6月26日午後8時過ぎ、二川宿は白須賀宿から御状箱(昔、書状を入れて使いに持たせた木製の箱)を受け取った。すぐに二川宿内の伝馬人、喜平次と弥左衛門が呼ばれ、吉田宿まで宿継ぎすることになった。途中、仁連木村の山中橋にさしかかると、突然何者かが抜き身を持って現れ、御状箱を奪い取ろうとした。このとき弥左衛門は用便のため後れており、1人で御状箱を守っていた喜平次が大声を上げたところ、散々斬りつけられてしまった。左目の下に長さ2寸程、左眉から背骨にかけて長さ4寸程、左手の甲から脛の縁へかけて長さ3寸程の傷を負い、右の薬指を中程から切り落とし、中指・人差し指も7分ほど切れ下がり、右の甲にかすり傷3か所を負った。喜平次は御証文大切と一心に思い、相手に挑んだが、出血もひどく、深手なので、とうとう御証文を入れた御状箱を奪われてしまった。弥左衛門が喜平次の声を聞き、それ何事かと不安に思って駆けつけたところ、もはや相手の者は夜の闇に逃げ去り、傷を受けた喜平次が倒れていた。その後の捜索で、深夜、飯村地内に散乱している御証文が発見された。

この事件では、たとえ盗賊の仕業であったにせよ、文書を継ぎ送るという宿場の重要な任務を果たせなかったため、宿役人は大いなる責任

を感じ、早急な対応をしている。

(『二川宿総合調査・文献資料編』)

本陣と脇本陣

本陣は、大名や公家、幕府役人などの身分の高い人々が宿泊または休憩する施設である。そもそも「本陣」とは戦で大将が構える場所のことだが、宿泊施設をも示すようになったのは貞治2年(1363)足利義詮が上洛の折りにその宿舎を本陣と称して関札を掲げたことに始まると言われる。現在、旧東海道に残る本陣建物は、二川宿馬場家と草津宿本陣田中家のみである。

東海道の本陣は、参勤交代が制度化された寛永12年(1635)頃から整備され、大名の利用が始まると、格式を持たせるために普通の旅籠屋との区別を明確にするようになった。それは、書院造(室町時代に始まり桃山時代に完成した武家住宅の様式で、基本として座敷に、床の間・違い棚・付け書院・帳台構えを設備するもの)を特徴とし、一般の家には許されなかった門と玄関を備えていた。さらに大名などが宿泊休憩する上段の間を持つ広大な造りとなっており、当時の建築技術の粋を尽くした。

本陣職はその土地(宿場)の有力者が命じられて世襲することが多く、苗字帯刀を許される等、大きな権力を持っていた。また、本陣経営には多額の経費がかかるため、問屋などの宿場の役を兼ねる場合が多かった。

二川においては、参勤交代が制度化された寛永年間以降、二川宿設置以来の有力者であった後藤五左衛門が二川中町の北側で、本陣と共に問屋場も開設していた。しかし、度重なる火災などにより後藤家が没落し、寛政5年(1793)正月の火災後、宿有力者であった紅林権左衛門が本陣職を譲り承けた。紅林家は後藤の名跡を継ぎ、東町の屋敷より後藤家



関札(二川宿本陣資料館)

の跡地へ移転して本陣を経営したが、紅林家も文化3年(1806)12月に発生した火災のために本陣経営が続けられなくなってしまった。そこで、紅林家の親戚であり、宿の有力者でもあった馬場家に本陣職が依頼された。本陣経営の困難さを知る馬場家は拒んだが、代官所の命により、文化4年(1807)に馬場彦十郎が本陣職3代目を引き受けることになった。しかし、馬場家では紅林家のように後藤家の名跡は継がず、東隣の脇本陣松坂屋権右衛門の敷地5間余を譲り受け、合計間口17間余の敷地に表門・玄関・板の間・書院棟等を増築した。このときから本陣の建物は二川中町の北側から南側に移った。

脇本陣は本陣の補助的役割をもつもので、従者が多い場合、本陣に藩主、脇本陣や旅籠屋に従者が宿泊した。また、他の大名の宿泊中にその宿場に入る場合、本陣ではなく脇本陣に案内されることもあった。本陣と同様にその経営には宿場の有力者があたった。

馬場彦十郎、苦渋の決意

文化3年の火災のために後藤家が本陣経営をできなくなって以降、宿役人の話し合いにより、旅籠屋の者が私の家にやって来て、「どうか本陣役を引き受けてくださらんか」と幾度も頼み込みましたが、「私の家も近年困窮しているの

で、とうてい本陣を務めることなどできません」と断りました。すると、次には宿役人と旅籠屋の者が一同で私の家にやって来て、「ぜひお願いします」と依頼を受けましたが、同じ理由で断りました。宿役人は、赤坂の代官所へ「五左衛門退職の後、本陣を務める者がおりません」と伺いましたところ、「宿場に本陣がなく済むものではない。名指ししなさい」と厳しく仰せられたので、宿役人は私彦十郎とのこれまでの経緯を申し上げたようです。その後、赤坂の代官所より呼び出しがあり、「その方に本陣役を申し付けるので、ご用を大切に務めなさい」と仰せ付けられました。「私は困窮していますので、本陣を維持できません。なにとぞ、このことについては恐れながら、ご容赦願います」とお断りしましたところ、「役所を恐れぬ不屈きな態度をとると、咎めもあるぞ」ということなので、親類とも相談し、本陣役をお受けすることにしました。

(馬場彦十郎家文書)

二川宿は、浜松と吉田という大きな宿場に挟まれ、また、比較的規模の小さな宿場であったために、本陣を利用する大名等は少なく、その内でも宿泊する者は全体の25%で、多くは小休こやすみと呼ばれる休憩であった。本陣は大名や幕府役人等公用旅行者の御用宿だが、経営に公費は充てられず、旅客者からの利益で埋め合わせる制度であったので、二川のように小規模な宿場の本陣は経営難に悩まされた。江戸時代も末期に近づくと、幕府の支援も期待できない上に自然災害が重なったために本陣経営は困難を極めた。

本陣、困窮につき嘆願す

東海道二川宿本陣より申し上げます。私どもは年々困窮しております。当宿は小規模な宿なので、御休泊が少なく、本陣・脇本陣共に助成が大変少ないため、大家の修理が行き届きませ

ん。すでに文政年間に惣代から道中お奉行様に対して難渋している事情を2、3度ご歎願申し上げました。追って御通知がある旨を仰せつけられましたので、宿に帰り、ありがたい思いで御通知をお待ち申し上げておりましたが、今もって御通知はありません。仕方なく所有する田を売り払い、ひどく壊れたところを修理しました。誠に困窮極まった状態に陥っています。去る申年(嘉永1年(1848))の西風で屋根が大破し、表通りの板の間は崩れ落ち、柱は腐り、御休泊は申すまでもなく、御休憩も務めることができず、大変申し訳ございませんでした。宿役人の方々の心添えによって御支配お役所からの拝借金や身寄りの人たちからの借金で、ようやく板の間を修理でき、御用の御休泊を務める次第でございます。(以下、略)

(嘉永3年(1850) 本陣・脇本陣連名の嘆願書)



復原された旅籠屋清明

旅籠屋

戦国時代までの庶民の旅行者は米を携行し、宿屋から薪たきぎを買って自炊する形式の宿屋(木賃宿)が一般的であった。江戸時代になると、宿屋の米と薪を買って自炊する形式を経て、しだいに宿屋が食事を用意する旅籠屋が増えていった。寛永10年(1633)代に寛永通宝が大量に発行され、金銭を所持する身軽な旅行が可能になったことも旅籠屋の増加を促したようだ。旅籠屋は1泊2食付きを原則とした。木賃宿は宿場外れの安宿として利用された。

二川宿は宿泊客が少なかったため、東海道の他の宿場と比較すると、旅籠屋数が少ない

方である。多いときで40軒（享保14年）、少ないときで20軒（安永5年）であった。天保14年（1843）の記録では、東海道の宿場の平均が56軒であるのに対して、二川宿は38軒であった。家数が同規模の御油宿・赤坂宿はそれぞれ62軒、岡崎宿112軒、熱田宿に至っては248軒の旅籠屋があった。

旅籠屋数	安永5年（1776）	20軒
	文政3年（1820）	30軒
	天保14年（1843）	38軒
	安政5年（1858）	32軒
	明治元年（1868）	24軒

旅籠屋の家屋はさまざまで、本陣や木賃宿が平屋なのに対して、2階建ても多く見られた。一般的には土間、板の間、部屋、座敷、勝手間、湯殿、雪隠、土蔵などを備えていた。

二川宿本陣資料館には清明屋が復原されており、旅籠屋の家屋の様子を知ることができる。

旅籠屋を飯盛女（江戸時代、宿駅の宿屋で旅人の給仕をし、売春も兼ねた女）を置いている飯盛旅籠とそれ以外の平旅籠に区別することもある。飯盛旅籠は格子戸の板の間の後ろに飯盛女を並べて客を引くので、客を集めるのに効果があり、その売上金の一部を宿問屋に上納することによって宿財政を支えた。18世紀になると、飯盛女を多く抱える旅籠が増加したので、幕府は、享保3年（1718）10月、旅籠屋1軒につき飯盛女を2名までと規制したが、なかには下女などという名目を付けて規定以上の女性を抱える旅籠屋があり、取り締まることができなかった。天保13年（1842）の二川宿には、旅籠屋37軒のうち、飯盛旅籠18軒で、飯盛女が58人いた。1軒で平均3人以上抱えていたことになる。

飯盛旅籠が宿場の繁盛をもたらす一方で、宿場内や近隣の村々の風紀を乱すという問題が発生するのは当然であった。そこで、旅人

が安心して泊まれる指定旅館としての講が民間でつくられた。その代表的なものが浪花講である。

飯盛女、身売りの事情

わたくしごと、近年身の上思うに任せず、とりわけ年貢に差し詰まり、困窮しております。当面どうしようもございませんので、親類どもと相談の上、娘のみさの同意を得て、ご縁により貴殿にお頼り申しましたところ、早速お聞き届けくださいましたので、御宿の旅籠屋飯盛奉公人に差し上げます。戊年2月16日から来たる子年2月16日まで、丸14年2か月16日、本年季を勤め申します。ご給金1両2分に定め、只今手形で金子残らず前借りし、確かに受け取りましたこと、間違いございません。（以下、略）

（天保9年（1838）2月 飯盛奉公人の請状）

飯盛奉公に出される事情のほとんどは、生まれた家庭の貧困からであった。奉公に出される年齢は15、6歳くらいからで、奉公年季



五十三次吉田（人物東海道）歌川広重 手招きする飯盛女

間は3年の場合から15年を越えることもあった。長期契約の女性の多くは、過酷な労働のために奉公途中で死亡することが多かったようで、30歳を越えている女性はまれであった。給金は本人でなく、家族などが前借金として受け取った。

飯盛女の心中事件

私の娘みつと申す者は、宿内旅籠屋半左衛門方へ飯売奉公に出しておりましたが、昨11日夜に家出し、行方が分からなくなっていると半左衛門方より知らされました。驚いて、すぐに親類や組合に手配し、あちこち探しましたところ、小嶋村の清次郎のせがれで清作と申す者と御町方地内字沢たりと申す溜め池で相対溺死しました。(中略) お上様にご苦勞をおかけし、幾重にも恐れ入ります。なにとぞご内済のお取りはからいを、とお願ひしましたところ、お聞き入れくださり、ありがたく存じます。(以下、略)

(安政6年(1859)8月)

飯盛女は言わば期限付きの人身売買であるため、他の宿場の旅籠屋に転売されることもあった。その境遇から抜け出すには、年季明けを待つか、身受けされるか、逃げ出す以外になかった。飯盛女の相愛の男性との駆け落ちは、他の宿場でも多かったようだが、そのほとんどは厳しい探索のために見つかって連れ戻されて折檻せつかんされたり、借金のために心中したりという悲劇的な結末を導いた。

宿場と加宿との宿泊小休をめぐり関係

二川宿では常備すべき100人100疋の人馬を加宿である大岩町の負担によって揃えて、人馬継立の業務を行っていたが、旅籠屋などの宿泊施設の設置が許されたのは本宿である二川に限られていた。それは宿場を保護するための幕府の政策であった。しかし、大岩町の

茶屋が旅籠屋より安い料金で泊めるようになると、茶屋の利用者がしだいに増え、貧困で余裕のない二川宿の旅籠屋の営業に影響を及ぼすようになってきた。寛政6年(1794)7月(推定)には、二川宿の旅籠屋が大岩町の立場茶屋を相手に訴訟を起こすという事件が起こっている。

ところが、さらに大名までもが茶屋で小休するようになってきた。五街道では大名が本陣以外で休泊することは禁じられていたのだが、大名にとっても参勤交代等はいへん負担になっていたため、少しでも経費を節約するために本陣を利用せず、しだいに茶屋を利用するようになったのであろう。大名が常時利用する茶屋を茶屋本陣と呼ぶこともあったらしい。二川宿本陣と役人は大名の茶屋への小休禁止令を幕府に請願した(文化8年(1811)2月)。

大名の茶屋での小休禁止を!

諸家様方の御参勤御交代の節は、本陣で御小休されることになっているはずですが、近年では諸家様方の中に端場茶屋等はしばで御小休になるということをお聴き及びになっていることと存じます。そもそも本陣というのは御参勤御交代の節に御休泊のために建て置かれたものですから、以後、端場茶屋等に御小休なさいませぬよう、水出羽の守(老中 忠成)様からご命令下さい。万石以上の方々に対してもお達しがございまして、このことを厳守するように御命令下さい。(以下、略)

幕府は改めて本陣以外への大名の小休を禁じた。このように二川の本陣・旅籠屋と大岩町の立場茶屋とは利害が衝突する関係にあったわけだが、大名行列などの大通行の場合には休泊施設の少ない二川宿としては、立場茶屋へ案内することで凌いでいたという側面もあった。すなわち持ちつ持たれつもちつもちたれつの関係でも

あった。

二川宿と助郷

宿場で常備した100人・100疋の人足や馬を使い切ったときに、不足分を近隣の村に割り当てられる村を助郷と言う。大名行列などの大交通は、農繁期に重なるために過重な負担がかかり、時代が下がるとともに疲弊する村が増加した。このため、宿場や助郷村では、まだ助郷役を負担していない村を指定して、追加の助郷を幕府に願い出た。二川宿でも天保年間には渥美半島の先端や三河山間部、碧海郡や加茂郡など遠方の村が追加指定されたが、これらの村は遠方のため人馬を出すことができず、二川宿や元来の助郷がお金で請け負った。

二川宿助郷惣代、道中奉行へ駕籠訴

東海道二川宿助郷25ヵ村惣代、松平伊豆守領分三州渥美郡牟呂村庄屋彦十が申し上げます。二川宿は海道無類の貧宿で、田畑は南は野原山、北は高山が続いて地味がたいへん悪く、実の採れる作物もありません。その上、たびたび焼失し、(中略)

助郷は元来困窮のところ、去る文化5辰年大風雨で高潮満水津波で助郷25ヵ村の内、渥美郡13ヵ村、同郡豊川辺より山水・野水・津波が一時に押し寄せ、百姓家屋の流失はもちろん、食糧・農具までも残らず流失し、海辺沿いは過半が津波に引き込まれ、およそ200軒余も破壊され、田畑は堤防や波止の決壊のために石砂が入り荒れ地になりました。(中略)助郷25ヵ村の内5900石も荒れ地になり、他の稼ぎ奉公等に出かけ、次第に人が少なくなり、御伝馬のご用を勤めがたくなり、現在の状況では宿・助郷ともに破綻し、ご用にご支障をきたします。そこでこれ以上放置することができず、去る卯年3月に宿と助郷が相談の上、荒れ地を起こして整備し、村の状態がかなりの程度に回復しますまで、

20年間の代助郷を指定していただきたくご愁訴申し上げます。

天保4年(1833)2月

二川宿助郷惣代の牟呂村庄屋彦十は2月2日に江戸に到着し、5日、江戸城へ向かう道中奉行に対して駕籠訴を行った。駕籠訴は、駆け込み訴えと同じく越訴の1つで、相当の処罰規定があったようだ。このとき白須賀の助郷惣代も一緒に駕籠訴しているということから、助郷の村々が極めて厳しい状態に追い込まれていたことがわかる。

宿場の人々の暮らし

江戸時代には村三役として、名主(庄屋)・組頭・百姓代が中心となって行政がすすめられていた。名主は村の行政を総括する人で、村内で信望のある者が推されており、世襲制・輪番制・選挙等で決められていた。組頭は、初めは五人組の頭から選ばれていたが、後には2、3名が任命されて百姓の総括や年貢米集めなどをするとともに名主を補佐していた。百姓代は村中で田畑を多く持っている人から選ばれて、名主たちを監視する代表であった。

村(町)の三役の下には他村と同様に五人組という小団体(組)が編成されていた。これは、近隣五戸をもって編成され、禁教のキリシタンや犯罪人を相互監視によって防止・告発させ、連帯責任によって年貢納入を確保する制度であった。五人組の頭は毎年3月に組の人々に五人組帳前書を読み聞かせて、これに連盟連判させた五人組帳を作成させた。

また、人々は必ず檀那寺をもつことが義務づけられていた。幕府は、寛文年間(1661-73)頃からキリシタン禁製の徹底を契機に、宗門人別帳を提出させた。宗門人別帳は、どこの寺の檀家であるかを記載したもので、はじめは居住地ごと一括されていたが、のち

人口・家族

東海道53宿中少ない方

安永9年(1780)	合計 1,157人・299軒
二川 635人・170軒	大岩 522人・129軒
文政3年(1820)	合計 1,289人・306軒
二川 799人・194軒	大岩 490人・112軒
文久元年(1861)	合計 1,440人・346軒
二川 799人・204軒	大岩 641人・142軒

に各宗寺院別に記載されるようになった。この人別帳は一面で現在の戸籍のような役割を果たしていた。

職業としては二川中町に旅籠屋が集中して

いるが、全体として商家や茶屋は少なく、宿場町とはいえほとんどが農家であった。しかし、農家も兼業で町村の人々を相手にした様々な商売をしていた。なお、商家には、質屋、味噌屋、酒小売店、居酒屋、荒物屋、魚屋、飴菓子屋、湯屋などがあった。

二川宿の職業

元治元年(1864)

大岩 二川

旅籠屋	0	31
茶屋	4	2
商家	10	15

天明の飢饉と流行病

二川宿は、去る11月上旬から町内全体に流行病が広がっています。とりわけ普段貧しい百姓がその病気にかかることが多いために困り果てており、麦耕作なども手遅れになりますので、親類の者や組合などにも依頼し、麦耕作を助け合っています。しかし、この春になってしだいに病人が増えており、疫病が全体に広がっていますので、食事や薬なども対処できません。看病する者もしだいにいなくなってきており、死亡者26人、今も50軒余りが病気にかかったり死亡したりして、子供ばかりが残る潰れ門(伝馬

役ができなくなった家)が9軒あり、難渋しています。

当面大切なお役も務めることのできない者たちが多くございまして、飢えや渴きのために生存が危うくなっており、苦難差し迫っております。これまでは宿役人たちが愚案ながら知恵を出し合って協力してやってきましたが、今後どのようになっていくのか、予測できません。恐れながら書付を以てお届け申し上げます。なお、この病はどんどん増えておりますので、恐れながらご注進申し上げます。以上。

惣役人

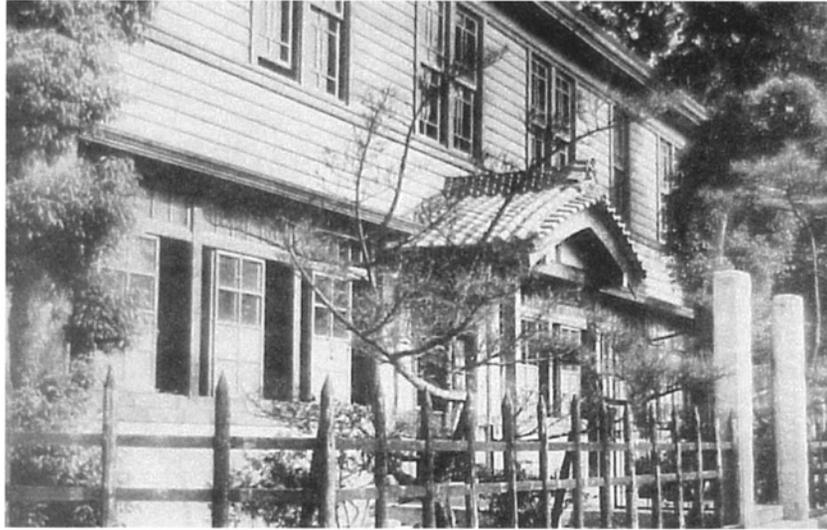
赤坂御役所

(天明4年(1784) 閏正月)



五十三次二川(人物東海道) 歌川広重

(本文内の古文書の引用は、『二川宿総合調査文献資料編』に依拠しており、それを現代語訳したものである。)



旧二川町役場

5 明治以後

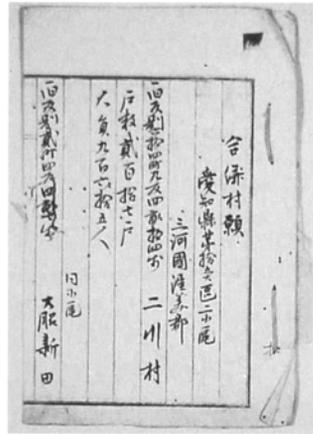
江戸時代末の慶応3年（1867）には、東海道二川宿で商売をしている家が62軒あった。そのうちの25軒が旅籠屋で最も多く、飴菓子店6軒、質屋・米屋が5軒ずつ、小間物店4軒、居酒屋3軒と続き、味噌屋・酒屋・荒物屋・魚屋・湯屋・床屋・左官がそれぞれ2軒ずつであった。この記録からみれば、この時期にはまだ宿場町としての性格が強かったことがわかる。

(1) 二川町の誕生

徳川幕府の直轄地であった旧二川宿・大岩加宿の両村は明治元年（1868）、吉田に置かれた三河裁判所の管轄となった。その後、三河県管轄となり、同4年（1871）からは額田県、翌5年末から愛知県の管轄となった。
大岩村・二川村から二川町へ 明治6年（1873）の統計によれば旧二川宿には宿屋業の16軒と米穀業の12軒が多く、続いて質業7、芸妓業・左官業4、味噌業・大工業3、酒造業・醤油業・油業・紺屋業・小間物業・湯屋業各2であった。宿屋業など、交通関係の業務が占める割合が低下する一方、工業が増え

て町の様子が変わってきたことがわかる。

明治11年（1878）末、愛知県は町村の分合を告示した。二川村ではこれより先の明治9年（1876）に大脇新田との合併を願い出ているが、このときに許可されている。



明治9年 合併村願

また、明治22年（1889）に全国に市制・町村制が公布されると、二川村は大岩村・谷川村と合併して大川村となった。この大川村は明治26年（1893）に町制を

布いたが、同30年（1897）に谷川村が分かれていった。そしてまた、明治39年（1906）には谷川村や太平洋に面した細谷村・小沢村を合併して二川町が誕生した。

二川駅の開設 東海道本線は明治5年（1872）に新橋・横浜間が開通し、同22年（1889）に全線が開通した。二川村では同19年（1886）末に地主83名が用地の買収を条件に鉄道敷設の誓願をしたが、他の住民や交通・運輸業者が鉄道敷設や停車場設置に反対した。このた

め鉄道の開通後も、二川駅の開業はなかなか具体化されることがなかった。

二川地区内で東海道本線の工事が完了したのは明治21年（1888）であったが、用地買収



旧東海道松並木と二川駅

や補償問題が解決して二川駅が開業したのは明治29年（1896）4月のことであった。ようやく実現した停車場は住民が希望した場所ではなく、町の中心からは離れたところ、旧大岩村の西にある現在地に設置されてしまった。

(2) 蚕糸と醸造

三河地方は古代から養蚕が盛んであった。たとえば、延喜式には奉絹国として伊勢国に続く第2位に三河国があげられるなど、平安時代には盛んに行われていたことがわかる。多くの国々からの奉絹のなかでも、とりわけ三河の糸は良質で、「赤引糸」や「犬頭糸」は現在でも伊勢神宮の神御衣の御料にも供されている。その後、三河は木綿の生産が盛んになり、養蚕や生糸・絹織物に関する記録は見つかっていない。そして、この地方に再び製糸業の隆盛をみるのは、明治になってからのことになる。

士族授産としての蚕糸業 徳川幕府が倒れ、武士を支配者とする封建制度はくずれた。このとき、全国の武士はその家族を含めて約150万人がいたといわれている。明治新政府が直面した大問題のひとつは、これら武士階級の生活をどうするかということであった。

彼らは新しい時代になって支配階級としての特権を失い、自らが働かなくてはならなくなった。そのため、新政府は「いかにして彼らに生業を与えるか」ということ、いわゆる『士族授産』を考えた。

この地方の蚕糸業も、この士族授産と深い関係をもっている。明治8年（1876）の調べによれば、旧豊橋〔吉田〕藩の士族の石高は、1万332石8斗3升、人数が1,043人となっている。これだけの人々がどのような職業に就こうとしていたのだろう。

その中に蚕糸業に進んだ人たちがいた。蚕糸業は士族授産事業のなかでも、有望な産業のひとつとして新政府も奨励したもので、これに基づいて豊橋藩でも積極的にすすめたものと思われる。つまり、士族授産対策として豊橋地方の蚕糸業の基礎がつくられた。



細谷製糸(株)

二川地区の製糸業 上細谷村の朝倉仁右衛門（1829～1885）は、明治10年（1877）に実弟の小柳津忠民（1842～1900）など地方の同志30余名で「赤心組」という養蚕組合を設立した。組合員は各自が桑葉を持ち寄り、労力を提供し合って仁右衛門宅で蚕の共同飼育を続けていた。また、明治12年（1879）には信州〔長野県〕その他、製糸業の先進地を視察した。その結果、三河で行われている座繰り製糸では生産性が低く時代遅れである。これからの製糸業は機械製糸でなくてはならないということがわかった。仁右衛門はさっそく同志にはかり、当時最新鋭をほこる上州〔群馬県〕の富岡製糸場へ伝習生を送ることを決めた。そして、農商務省からの許可を得て13名の女

子を富岡へ派遣した。この計画は明治16年(1883)に40人取りの細谷製糸株式会社の設立となって実現した。朝倉仁右衛門らは近代製糸業の基礎固めをしながら、洋式機械製糸への道を進んでいった。

小淵志ちと糸徳社 時代は前後するが、草創期の蚕糸業を支え、玉糸製糸法の創始者小淵志ち(1847~1929)を忘れることはできない。士族授産の企業としての製糸はその多くが失敗しているなか、農家が自給を目的とする座繰製糸は盛んになった。これにともなってこの地方でも養蚕が盛んになり、前に述べた赤心組の影響もあって繭の生産も増加してきた。明治12年(1879)6月に、群馬県出身の小淵志ちは、大岩地内に300坪の土地を買い、『糸徳』と命名した工場を建設した。

玉糸製糸の始まり 明治20年ころになると、この地方の蚕糸業も一大発展を遂げるようになった。当時は質のよい精繭から生糸をとっていた。しかし、繭のなかには2匹の蚕虫がつくった質のわるいものもあり、玉繭と呼ばれていた。全繭量の約2割がこの玉繭であるといわれ、繭の生産量が増えるにつれて玉繭の量も増えてきた。

志ちはこの玉繭に着目した。明治25年(1892)、玉繭から糸をとる方法を考案し、玉糸と名づけた。原料の玉繭は安く入手でき、競争相手がほとんどいないことから、糸徳はこれまでの生糸工場から玉糸工場として再スタートし規模も拡大した。

明治28年(1895)には寺沢出身の大林宇吉



糸徳第2工場(二川駅付近)

(1860~1933)が座繰玉糸の製造に蒸気機関を応用することに成功し、玉糸の生産は飛躍的に増大した。そして、このころから東三河の各地に玉糸製糸工場が設立され、販路も拡大していった。

日清戦争後は玉糸相場が暴騰し、価格も従来1梱220円が320円にもなり、玉糸製造者は急増した。なかには利益だけを求めて粗悪品を販売する者もでてきて、玉糸の信用は落ちてしまった。そこで、粗製濫造を防ぎ、製品の統一や職工の保護を目的とした同業組合をつくる機運も高まり、明治34年(1901)の三遠玉糸製造同業組合の結成として実を結んだ。

三遠玉糸製造同業組合の活動とともに、東三生糸製造同業組合の活動もこの地方の製糸業を支えた、もうひとつの輪として忘れることはできない。この組合が設立された後は、生糸の海外輸出に力を注いだり、夜間取引の多かった繭の売買を昼間取引に改めたりするなど、この地方の生糸製糸業発展のために努力している。

製糸業の衰退 第一次世界大戦後の恐慌や関東大震災後の不景気を乗り切ってきた製糸工場も、太平洋戦争遂行のための国家統制には勝てなかった。昭和13年(1938)に公布された『国家総動員法』による経済統制の強化で、



三遠玉糸製造同業組合事務所

三遠玉糸製造同業組合 三河・遠州地方の玉糸製造業者は、三遠玉糸製造同業組合を設立しました。この組合の目的は、共同して玉糸の改良をはかるとともに、粗製濫造を防止し販売地域を拡張するなど、組合員の利益を増進することにあります。組合の結束は固く、規則も厳しかった。例えば、女工の勝手な都合や好条件を求めての職場がえを認めないなど、女工争奪の歯止めとしていました。また組合独自の商標の設定や製品の格付けを行なうなど、玉糸製糸業の改善に大きな役割をはたしました。

桑畑は減反の対象となった。また、製糸工場
のほとんどが軍需関係の工場への転用又は廃
業を余儀なくされた。

二川関係の組合員 昭和6年6月調査〔数字は釜数〕

東三生糸製造同業組合		三遠玉糸製造同業組合	
後藤 長三郎	212		
戸田 源吉	124	多米田 仁作	362
山本 七蔵	130	後藤 嘉吉	248
西川 伍朗	66	後藤 佐平次	82
和久田 唯雄	82	小淵 義一	483
柴田 蓑作	90	山本 呈次郎	30
倉橋 織之介	20	高屋 和男	20
加藤 権七	50		

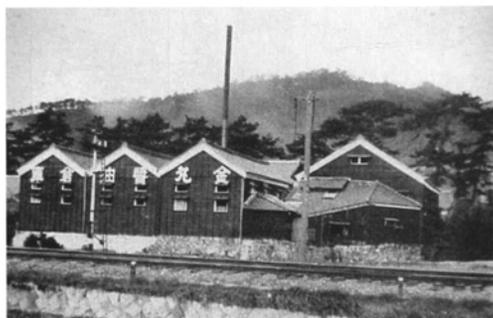
市立商業学校創立10周年記念誌から抜粋

二川で戦中から戦後にかけて操業していた
のは、生糸の後藤製糸と、玉糸の糸徳製糸の
2社だけという衰退ぶりであった。

醸造業 醸造は、微生物による発酵作用を応
用して酒や味噌、醤油などをつくる産業をい
う。この地方〔三河〕の味噌・醤油は大豆を
原料にして、長時間かけ、自然に熟成させた
豆味噌やたまり醤油である。

前にも述べたように、二川では幕末に味噌
屋と酒屋が2軒ずつ、明治初年にも味噌業
3・酒造業と醤油業各2と記されている。

二川で味噌・醤油の醸造業がおこる条件を
考えると、まず原料となる大豆が江戸時代か
ら水田の間作として栽培されていたこと。つ
ぎに仕込みをする時期が冬の農閑期にあたり、
労働力を得やすかったこと。そして本陣をは



醸造業を兼ねた製糸工場もあった

じめ旅籠など、味噌やたまりを必要とする職
業の家が多かったことなどがあげられよう。

さらに鉄道が敷かれ、二川駅が開業すると
生産量の増加によって不足しがちな原料（大
豆）の調達も便利になった。また、製品の販
路拡張にも鉄道の開通は好都合であった。そ
の結果、最盛期には二川で6軒の醸造工場が
操業していた。

(3) 太平洋戦争と開拓の歴史



今も残るトーチカ跡

本土決戦と怒部隊 太平洋戦争の末期、軍や
政府は『一億総玉砕』という考えのもとに本
土決戦への準備をすすめていた。豊橋周辺で
は、第73師団が渥美郡から東三河一带に配置
された。基幹部隊の将兵は国民学校など公共
の建物や民家に合宿して陣地の増強に努め、
渥美半島地区の防衛にあたることになったが、
その兵力・兵器もいざとなれば心もとない状
態であった。しかし、岩屋から高山射撃場一
帯には防衛陣地が築かれ、地下司令部も設け
られた。岩屋山には要塞砲陣地が設置され、
トーチカや防空壕・塹壕も掘られて本土決戦
に備えた。敗戦直前の昭和20年（1945）7月
現在、二川地区には第73師団速射砲隊（怒
14306）と野砲兵第73聯隊（怒14307）とが配
置されていた。この第73師団は通称号を怒部
隊と称した。これは『怒髪衝天』という古語
に由来したもので、日本がサイパン島失陥直
後に編成された師団であった。

国民生活のすべてが破局に向かうなか、広

島と長崎に原子爆弾が投下された。物心両面で戦う術^{すべ}をなくした日本はポツダム宣言を受諾し、連合国に対して無条件降伏した。そして、昭和20年（1945）8月15日の正午、国民は昭和天皇の玉音放送を通して日本の敗戦を知った。同時に日本軍の武装解除が行われ、二川に置かれていた怒部隊も解散した。

台地の開拓 梅田川の左岸（南側）、現在は二川南校区になっている地域には、天伯原や高師原の台地が広がっている。現在は野菜栽培を中心とする大規模な畑作地帯であるが、明治以前は小松や灌木しか生えない原野であった。それは、まずこれらの台地は赤土とよばれる強酸性で有機質に欠ける痩せた土地^{あかつち}であること。次に、洪積台地であるため地下水位が低く農業に必要な用水の確保ができなかったことなど、農業には不向きな土地であったからである。二川地区での開拓は『豊清』や『荒古』は明治のころに、『弥栄』は昭和のはじめころから行なわれている。

玉音放送で日本の戦後が始まった。これはまた、飢えと失望からの出発点でもあった。日本国中に復員軍人や失業者があふれ、まさに危機的な状況であった。国は食糧増産と失業対策という二つの目的から、緊急開拓事業を進めた。豊橋でも旧軍用地であった高師原・天伯原は、愛知県下最大の開拓地として脚光を浴びることになった。二川地区では『豊栄』がこれに該当し、昭和20年ころから開拓が始まった。しかし、これらの地域は前に述べたように乏水性の台地にあり、水の確保が困難であった。そのため、かんがい用のため池を掘るなど、農業用水だけでなく毎日の生活用水の確保にも大変な努力を要した。これを当時の人は

鬼の天伯 地獄の高師 流す涙が梅田川
とうたった。

豊川用水の通水 この水不足という大問題を

解決したのは、19年の歳月と500億円もの費用をかけて完成した豊川用水であった。天水に頼っていたこれらの地区の農業も灌漑農業に変わり、作物は変化した。低地の水田も湿田から乾田への転換がおこなわれるとともに、作付けされる稲の品種も晩稲から早稲種へと変わった。

かつては早魃^{かんぼつ}に強い「さつまいも」や「麦類」が主な作物であった台地上の畑地にも大きな変化が起こった。それは用水の通水以後、各種の蔬菜や果樹の栽培が可能になった。水を大量に必要とする温室やビニルハウスなど施設園芸も出現した。また、露地に作付けできる品種も増え、通年栽培もできるようになった。

6 豊橋市への合併



市役所前に行く合併記念の旗行列

昭和の大合併 昭和24年（1949）シャープ税制調査団は「地方自治体の財政確立のために、合併を進めて地方自治体を適正規模まで引き上げなければならない」と日本政府に勧告した。これを受けて、28年に政府は「町村合併促進法」を3年間の時限立法として制定した。愛知県でも「愛知県町村合併促進要項」を決めて、県下の町村合併を推進することとなった。

当時、二川をはじめ豊橋市に隣接する町村の財政は苦しく、豊橋市との合併を望む声が強かった。一方、豊橋市側にも合併を積極的に進めたい理由があり、豊橋市を中心とする

町村合併の動きが活発化した。豊橋市は経済圏や生活圏を同じくする渥美・八名・宝飯3郡、3町7村との合併を推進することにした。その結果、昭和30年（1955）3月に二川町をはじめ高豊村・老津村・石巻村・前芝村の5町村が豊橋市に編入された。

内陸型工業地域 第1章でも述べたように「二川は交通の要地」にある。国道1号（旧東海道）が梅田川の南に付け替えられると、旧市街地の南に工場の立地が始まった。特に、陸上輸送の主役が鉄道からトラックに代わったことで、国道1号の沿線に工場誘致が進んだ。また、校区の東南方に内陸工業団地〔中原・豊清・三弥地区〕が開発されると、そこに京都ダイカストや日東電工・神鋼電機など比較的規模の大きな工場が誘致されている。これも国道1号や42号による陸上輸送の利便性が大きな立地理由になっている。以後も二川とその周辺には大小の工場が誘致され、現在では一大内陸工業地域を形成している。

郊外型住宅地 『工場は平地へ下り、住宅は丘を上がる』と言われる。二川地域に立地した工場群は大量の従業員を必要とすることになる。それは通勤圏の拡大を意味する。事実、昭和47年（1972）になって主要地方道豊橋湖西線（二川バイパス・立岩街道）が開通すると、一般家庭にも普及した自家用自動車と相俟って豊橋市街からの通勤も可能になった。このことは、朝夕の通勤ラッシュを生んだ。幹線道路や生活道路は混雑が激しく、住民の生活にも支障をきたすようになっていく。



バイパス風景

このことはまた、二川バイパス北側の住宅地化をも促した。住宅地化が進んだ二川の急激な人口の増加は北部での住宅地の開発となって大きな変貌を遂げた。

地区市民館第1号 昭和47年（1972）豊橋市社会教育審議会は「市民を取り巻く社会環境の急速な変化に対応するため、社会教育施設の充実を図る必要がある」との提言を行った。これを受けて豊橋市は『地区市民館建設構想』を立案した。これは各中学校区に1館の地区市民館を建設するというものであった。そして、昭和49年にその第1号として『二川地区市民館』が開館した。ここには大集会室・図書談話室・高齢者室などが設置された。これらは高齢者大学や女性教室などに活用され、地域コミュニティセンターとしての機能を果たしている。



第1号の地区市民館（二川地区市民館蔵）

さらに、昭和54年（1979）からは小学校区ごとに『校区市民館』も建設され、校区の生活に密着した生涯教育施設の充実が図られている。

7 水と緑と歴史のまち

二川には梅田川をはじめとする水辺、弓張山地の緑に加えて中心部の歴史的な建物など、多くの資源がある。この校区に住む私たちに与えられた使命は、この恵まれた資源を生かしながら、より住みよい二川づくりを進めることであろう。

新しい二川へ 二川・大岩の市街化は、戦後の内陸型工業立地によって国道1号沿道に拡

大した。結果として、JR東海道本線は市街地を南北に分断することになった。特に豊橋総合動植物公園が整備されると二川駅南口の必要性や南北の連携強化が必要になった。そこで、平成10年度から5年をかけて二川駅の橋上化・南北駅前広場の整備や二川南駅前通の整備を一体化した『二川駅周辺整備事業』が実施された。

また、岩屋緑地は岩屋観音を取り巻くようにして風致地区に指定されており、体験学習公園として整備が行われている。これが完成すれば、散策を中心とするエコパーク、里山管理実践のための雑木林などが整備されることになっている。



整備が進む岩屋緑地

貴重な遺構と二川宿本陣資料館 旧二川宿の本陣が豊橋市の史跡に指定されたことをうけて改修・復原工事が行われ、平成3年(1991)に豊橋市二川宿本陣資料館として開館した。また、本陣に隣接する清明屋も旅籠の遺構として復原され、本陣と一体化した生涯教育の場として公開されている。

また、新橋町にある駒屋は江戸時代末期の商家遺構として貴重な存在である。復原して、

これも本陣と一体的な施設として公開するよう、計画が進められている。



駒屋と瀬古道

新橋川の改修など 大岩・二川には弓張山地南麓を集水域とする宮川と新橋川とがある。これらは大岩と二川とが合宿するとき、それぞれの町並みを鉄砲水から守るために掘られた排水路である。近年、宮川では「ふるさと砂防工事」が実施され、川沿いには散策路、中間地点には遊砂地も設けられている。新橋川も宮川と同様の整備が予定されている。



改修が終わった宮川

『水と緑と歴史のまち二川』に私たちは住んでいる。何を・どのように生かし、残していくのかは、校区の皆で考えていかねばならない大きな課題であろう。



「すみれの花咲く頃」の歌碑

すみれの花咲く頃 誰もが、どこかで、一度は聞いたことがある歌です。『宝塚の帝王』と呼ばれた白井鐵造の作品です。原題にあった「白いリラの花」は、彼の訳詩では「スマレ」になっています。自然が豊かな二川には今でも野生の「スマレ」もたくさん咲きます。この曲を聴くと、彼が暮らしていた頃の二川の自然や人々の人情が浮かんでくるようです。歌碑は二川の町並みを見下ろす高台に建っています。

第3章 教育と文化

1 学校教育『二川小学校の歴史』

(1) 江戸時代

江戸から明治にかけて、豊橋（吉田）近辺の町人や百姓の子は100年に及ぶ寺子屋で、武士の子弟は藩校でそれぞれ学んだ。二川・大岩の子どもたちは、松音寺、大岩寺の住職や漢学者の岡道磧ら2、3人が開いていた寺子屋で学んだ。8歳ぐらいで寺子屋に入り、“読み、書き、そろばん”を3年ほど勉強した。児童のことを寺子といったが、その数はあまり多くはなかった。

(2) 明治時代

① 二川小学校の誕生

明治5年8月に学制が發布された。学校沿革誌には、二川小学校の創立が明治6年9月となっているが、『明治5年（1872）4月、二川、大岩、谷川の3字連合して1校を立て“義校”と称す』という記録もあるので、明治6年以前に学校としての形はできていた。

その後、学校は松音寺から大岩寺に移転し、分離してからは妙泉寺、八幡社、神明社に移った。



明治6年9月
松音寺に二川学校設立



寛明学校（明治7年に改称）
で使用了本

② 当時の学校制度

明治38年（1905）校訓を制定

立派ナ役ニ立ツ人トナレ。

一、マジメデアレ

二、ヤッカイニナルナ

三、タメニナルコトラセヨ

四、キマリヨクセヨ

この頃の児童には「おさらいはできるか」「両親を何と呼ぶか」「親の言いつけを聞くか」「鳥・獣をいじめるな」「人の家や塀に落書をするな」「他人の物はごみ一筋なりとも犯すな」などといった躰がなされた。

児童への賞罰としては「学力優等操行善良につき、本県より賞与。賞品は万国新地図や和服裁縫道しるべ、小学児童作法訓画、勅語教訓画、勅語物語『菊の下水』、修身訓画、戦役実話『誠心教育資料』など。また、8年間無欠席の児童に本校より半紙10帖を与えた」という記録もある。

教科や授業料（明治34年改正小学校令）

- ・尋常小・・・修身・国語・算術・体操
- ・高等小・・・修身・国語・算術・日本歴史地理・理科・図画・唱歌・体操・裁縫（女子）

その後、尋常科には、唱歌・裁縫・図画・手工科等が、高等科には、農業・英語が設けられた。授業日数は、明治42年には256日、43年には262日で、現在の授業日数約200日と比べるとずい分多い。

授業料は、尋常科では最高10銭、最低2銭5厘、高等科では1人月額20銭、15銭、10銭の3種として児童の家計により課していた。

兄弟が就学するときは、2人目より半額で、出征軍人の家族が就学する場合は授業料が全額免除された。

学校行事

当時の学校の様子が学校行事によく表れている。

- ・1月1日から3日間、児童の成績物、書き方、手工品、一般住民有志の書画、夜学生の書き方、農産物、生花等を陳列。一般父兄来館する者甚だ多し。
- ・幻燈師を招聘し、家庭教育幻燈会を開きたるに父兄の参集500名以上の盛会なり。
- ・世界一周単身旅行者竹内五郎吉氏を聘し、尋常3年以上の児童に外国の人情、風俗、教育、家庭等につき講話を乞う。
- ・教員の指揮の下、6月上旬から苗代田に於ける螟虫駆除、卵塊及び蛾の採集を実行せり。55,000採集。採集したるものは町農会にて買い上げ、児童はその代金を郵便貯金にした。授業後にも児童が捕獲するを奨励す。
- ・近来稀なる降雪。積もること56寸より1尺(15cm~30cm)雪中運動の好機逸すべからずとて、午後高等科全体、職員引率して西松明峠に上り、ザラザラ山、岩屋山などを経て、途中二回投雪模戦を施行
- ・明治44年(1911)から宿直を置く。賄料1日金10銭給。宿直者は教育勅語を奉護し、火災、盗難等を警戒す。

③ 時代の趨勢と学校教育

学校沿革誌を読むと、社会の変化が学校教育に大きな影を落とし始めていったことがわかる。

- ・高師原の兵式体操講習会に校長・訓導が出張。講師は曹長・軍曹。また尋常科3年以上の児童、砲兵第三連隊の実弾射撃を参観
- ・兵庫県下に於ける海軍大演習御親閲の為、天皇陛下、本日午後4時12分、当駅御通過。職員・生徒は当地停車場に至り、謹んで奉迎せ

り。帰りも同様。この年計7回。

- ・学校職員の名を以って本町出身軍人に新聞紙や全校児童の成績物を送呈し慰問。

(3) 大正時代

① 軍靴の足音

大正時代に入ると、社会の動きがますます学校教育に色濃く表れるようになった。

- ・大正元年(1912)、天皇陛下御病気。治癒を祈るべく、二川大岩氏神へ職員・生徒参拝。授業を中止し、生徒を講堂に召集し、謹慎すべき旨訓告す。学芸会挙行の予定なりしが唱歌を削除して開会。
- ・戦勝記念式挙行。式後、記念講話会開会。
校長・・日露戦争の原因、日本海海戦とその結果、われ等の覚悟
訓導・・我が海軍の志気、東郷大将の謙譲とその部下、薩摩男子・嗚呼玄海洋、乃木大将
- ・青島陥落につきご祝意を表するため午後6時より提灯行列をなす。尋常3年以上の生徒男隊伍を整え校門を出てまず大岩神明社に参拝、出て停車場に至り万歳を三唱し、これより街道を東へ練り、二川八幡社に参拝、東端に出て元来し道を帰り、学校にて解散。時9時。
- ・模式飛行機、大阪に向かう途次当地通過につき第2、3時はこれを観察せしむべく授業を休み天空を仰ぎ待ちこがれ居りしに、正午に至り漸く一機松明峠の北方を通過し、尚一機は0時半に至り、先回よりは稍く南方を通過す。
- ・校庭に於いて二川町招魂祭を執行せらるる。神楽、角力、撃剣、柔術、投餅等の余興あり。
- ・海軍戦勝記念式挙行。式後、裏山中腹を横切り馬込に至り、学校まで各学級、マラソン競走を行う。

② 子供の生活

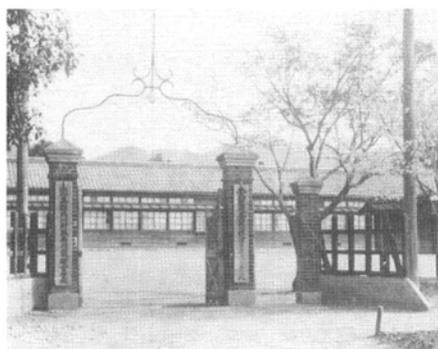
この頃の子供の生活の様子を、西郷七郎さ

んは次のように記している。

学童帽子はほとんどの子がかぶっていたが、頭にかぶるものだからと厳しく言われた。先生に会った時はおじぎをするように言われていたので、学校で先生に会うたびにおじぎをしていたら、1日1回でよいのだと注意された。

家に帰れば野良の手伝いなど仕事が待っていた。遠くからバケツで井戸水を運び、薪を割り、風呂を沸かすのも子どもの仕事だった。また、菓子や小遣いなどもらえなかったので、チガヤの根が甘いからといってしゃぶったり、唇を汁で赤く染めて山グミや山モモなどをほおぼったりした。

2年生のとき、家庭に電灯がともって、夜など本を読む大きな声が、道を歩いているとあちこちの家から聞こえてきた。



大正12（1937）年頃の旧正門

③ 授業の思い出とエピソード

紅林太郎さんは、当時の学校生活の様子を次のように記している。

大正の末期から昭和の初めにかけては不況のどん底であったが、児童も先生も比較的のんびりとしたものがあつた。しかし、勉強には厳しかった。学校で行われたテストをクラスまとめて家庭に回覧し、判を押して次の家庭に回したり、4年生の時には能力別にクラスを分けたりした。中学へ進学する者はごく少なかったが、その者は6年になると予科といって毎日暗くなるまでしぼられ、現在の補習どころではなかった。常にスパルタ式で、体罰や鞭がよく飛んだ

ものだった。

<学校の怖い話>

約三百余年前の寛永年間、江戸時代の初めの徳川家光が將軍職にあつた頃、二川に代官所が設けられていた。代官所は江戸幕府の直轄地を支配し、代官（役人）が事務を取り扱った。この代官所の陣屋が大岩寺近辺にあり、現在の給食室付近に牢獄があつた。その北側に囚人の使つた便所があり、暗くてじめじめして陰気なところであつた。この便所から赤い手・青い手が出るといううわさを聞いたことがある。これは囚人の苦しみ、虐げられた恨みが、赤い手・青い手となって現在までも救いを求めていたからではないか。

(4) 昭和時代（戦前）

① 軍国主義教育への道

昭和11年（1936）の2、26事件後、天皇の神格化がますます進み、軍部が統帥権の権威付けにうまく利用していった。各学校では御真影を奉護する奉安殿が設置された。

近衛首相によって大政翼賛会が結成され、今こそ『天皇への帰一の下、国民は一致団結して国を動かすべき』となった。そして、日独伊3国軍事同盟、太平洋戦争へと突き進んでいった。満州事変・日華事変以来、教育は急速に軍国的色彩が濃くなり、昭和16年に小学校は国民学校となり、そして、戦局の激化に伴い、食糧難、生活物資の不足、学徒動員、空襲による校舎の焼失等、全く正常な教育機能は停止した。

昭和19年、20年の敗戦間近の頃の学校沿革誌には次のような記述が残されている。

- ・裏山開墾作業開始。裏運動場を開墾し畑とする。大脇の山、大穴・向山の荒地開墾。
- ・防空壕避難練習実施。敵前式技演練查察。
- ・空襲必至態勢につき児童出校停止。
- ・艦載機来襲のため授業停止。

- ・怒部隊将兵数百名、講堂、前教室、及び第二校舎二教室使用。二部授業実施。
- ・高二男、三河航機・日本アルミニウム会社二川工場へ入所。動員学徒壮行式。

勤労働員は学徒にとって、最大の受難と言える。動員先は、軍需工場・事業所・交通機関・農山村、期間は継断続か通年、作業内容は軍需品の生産・輸送、食糧増産、松根油・すすきの採集、校庭などの耕地化であった。

② 正常な教育機能の停止

浅野浩一さんは、当時の様子を次のように記している。

物資は欠乏の一途をたどり、靴、服などは配給制でなかなか手に入らず、わら草履を自分で作って通学した。学校の裏山を開墾してサツマイモや麦などを作り、夏休みには学校の農園の肥料にする生草を牛車一杯1人で刈った。

戦争は日を追って激烈になるばかりで、昼となく夜となく敵の飛行機は次々と日本を戦火に巻き込んでいった。夜など灯火管制といって家の電燈の光を外に出さないように電燈に覆いをした。暗い部屋では勉強どころではなかった。昼間は、戦争に借り出されていく人びとを生徒の演奏する楽隊で駅頭まで送って行った。長いのぼりを押し立て、『わが大君に召されつつ、命栄えある朝ぼらけ・・・』と歌いながら、出征兵士を送ったのである。まだ元気に出て行く人を送っていくのはよかったが、無言で帰ってくる人を迎えるときは辛かった。『海行かば、水くかばね・・・』と静かに流れる歌声にむせび泣きする遺族の声が、小さかった私の心を締めつけ、戦争は嫌だと心の底から思った。

戦争はますます激しく、学業を捨てて軍需工場へ勤労奉国隊として働きに借り出された。今思えばよくも小さな子どもが旋盤やヤスリを操って国のためにと働いたものだ。

昭和20年(1945)、敗戦色いよいよ深まり、連日の空襲に豊橋も焼け、豊川も焦土と化し、

この時、学徒として軍需工場で働いていた友達が大量死んだ。

勉学に励んでおられる生徒諸君のなんと幸せなこと、戦争のない平和な世界で伸び伸びと学業を修められ、私たちの歩んだ道を再び歩まないように願う者の一人である。

③ 書けない鉛筆、消えない消しゴム

昭和18年に入学した野口幸子さんも、戦時中の頃を次のように回想している。

ボール紙でできたランドセルを背負い、古い着物をほどこいて母が縫ってくれた手製の標準服を着て、わら草履を履いて通学。

防空演習で明け暮れ、落ち着いて授業を受けることができなかった。教科書は紙の節約で小さな活字が紙面いっぱい並び、ノートは紙質が悪く、石の入ったような鉛筆で書くと紙がすぐ破れた。書いた文字を消しゴムで消そうとすると、黒くなるだけで消えなかった。

5、6年になってやっと落ち着いて授業が受けられるようになったが、1クラス60人以上のすし詰め状態で教室はいっぱいであった。

昭和20年の4年生は148名おりながら、男73名と女75名の2学級であった。



昭和19年の木造校舎

また、戦前の沿革誌には次のように記されていた。子どもたちのおかれていた生活環境が想像できる。

- ・ 蠅取りデーにつき、各家庭に蠅取り紙を一枚配布。大清潔法施行、便所にクレゾール液を撒く。

- ・腸チフス・疫病発生、教室消毒。
- ・寄生虫（回虫）駆除のため、児童に海人草を服用せしむ。虚弱児には肝油を服用。
- ・農繁期、講堂で託児所開設。

(5) 昭和時代（戦後）

① 学校教育復興への道

「21年4月より新学制により、校名が愛知県渥美郡二川町立二川北部小学校となった。北部、東部校区を合併し二川中学校を設立したが、校舎なきを暫定措置として本校に併設。これが為に午前小学校、午後中学校校舎使用の二部になった」と沿革誌に書かれている。

また、「昭和21年、軍国主義的なもの、極端な国家主義的なもの、武道的なもの（薙刀、木刀等）、大東亜戦争関係のもの、その他進駐軍の気にふれそうな図書、掛図等焼却。一部大切と思われるものは二川町図書館へ寄贈し、学校に残る図書、掛図ほとんどなし。」「防空壕埋め作業開始。新教育・憲法伝達講習会、学校衛生研究会、奉安殿撤去作業開始。破損硝子入れ替え作業開始（校区父兄の寄付）」という記述も見られた。

この頃の購入図書には、「新憲法講話、新学校体育、学校に於ける民主的生活の指導、新エミール、少年は訴える、山彦学校」があった。また、こんな混乱の中でも、6か年精勤した者が29名おり、1か年精勤となると6年生で75名にのぼった。

② 学校生活と子供の遊び

昭和21年から20年間、本校に奉職された女性教師は、当時の子供たちを「輝いていた自然児」と題して次のように記している。

敗戦で豊橋の街が焦土となった頃、子どもたちは食べることもままならない状況だった。

豊栄地内の開拓地から通学する子どもたちは、雨降りには被りゴザを被って登校していたが、兄弟が多い家庭ではゴザが不足していたのでや

むを得ず欠席する子どももいた。

どこの家でも子どもは5、6人で、三代が同居している大家族であった。育ち盛りの子どもを抱えた世帯の父親は、学校に来訪し、「元旦の雑煮が朝だけで一白なくなっちゃった。」とよくぼやいていた。

当時、二川小では児童数が千人を超えていたので、運動会などトラックの周りに全校児童の席を取ることが大変だった。

子どもたちはよくけんかもしていたが、教室は危ないので外に出て体と体のぶつかり合いをさせた。そして、頃合をみて「そこまで」というとピタッとやめた。教室に戻ると、まるで何事もなかったようにケロッとして仲良く談笑していた。授業では教室内がしんとして無駄口を言う子もいない状況で、しっかり勉強に励んでいた。

夏ともなれば、梅田川に泳ぎに行ったり、タモを使ってハヤやザリガニを取っていた。アケビの熟れる秋には山に入り、熟れてはげたアケビの実を口に含み、種をポッポッと吐き出していた。

また、学校帰りや休日には皆でよく集まり、安全なお宮やお寺などで、パンキー遊びやビー玉遊びをしていた。

いじめ、不登校、児童虐待など深刻な問題をかかえている今、物質的には恵まれていなかったが心の豊かさがあり、生き生きと輝いていたあの頃を思い浮かべると、本当の豊かさとは何だろうと考えさせられる。

③ 人の和で結ばれたPTAが発足

初代会長に田村啓次郎さんを迎え、昭和23年に父母と教師の会としてPTAが発足した。PTAの設立にはあまり苦労はしなかったが財政的には苦しかったと、2代目の会長朝倉輝雄さんは、次のように記している。

北の運動場は、少し強い雨が降れば裏山の水で石ころだらけになってしまい、整地が大変。

そこで、PTAの奉仕作業で水路を作り運動場に水が流れ込まないようにした。また、戦前から続いている正月の展覧会や品評会では、家庭から出品された品を宝くじ方式にして即売会を開いたのが大成功で、3万余円もの利益があった。遊具が何もなかったので、このお金で作ろうということになったが、鉄材もセメントもない。セメントは闇で何とか仕入れたりして、回旋塔2台とブランコ（8人乗り）2台を作り上げることができた。子どもたちの満足そうな表情を見て、足りない物資を求めて歩き回った苦労も忘れた。PTAのあるべき姿の一端を見出したような気がした。

(6) 創立100年を超えた二川小学校

① 記念事業

昭和30年に二川町が豊橋市に合併され、校名が豊橋市立二川小学校となった。そして昭和47年（1972）、創立100周年を迎え、記念事業を催した。校舎の竣工式に記念事業の式典を重ねたり、運動会や学芸会の頭に「創立100年記念」の冠を付けて行った。PTA新聞「ふたがわ」も記念特集を組んだ。また、この年、運動場東側にイチヨウの木10本を植樹したが、今では秋に多くの銀杏を落としている。



創立100周年記念の頃の全景

② 『語り指導の系統と方法』（明治図書）発刊

昭和43～47年にかけて、講師に愛教大助教授安達隆一先生や審議会専門委員の湖西中学

校教頭鈴木波男先生を迎えて「語り指導」の研究を続け、公開発表をした。全国的にも珍しい発表で、静岡からも来校されるほどであった。46年に明治図書から「語り指導の系統と方法」を発刊した。これも創立記念事業の一つで、発刊祝賀を兼ねて公開現職教育を催した。

③ FBC（花いっぱい運動）の取り組み

環境美化と情操教育の一環として昭和41～46年の間、花いっぱい運動に取り組んだ。41年には中央審査で県優良校に輝き、県外からの参観者も得た。今も1年を通して種々の美しい草花が植えられ、子どもたちの目を楽しませてくれる。

④ マンモス校解消に向けた二川南小の分離

昭和57年には児童数1,770名を数え、43学級（普通学級41、特殊学級2）、教職員数55名となった。しかも、6年が6クラス以外、他学年は7クラス。ほとんど1学級44人くらいで、教室は満杯といった状況であった。クラブ数も32、通学団数も45で、飼育小屋のところにも校舎があり、図書室もプレイルームもすべて教室として使われていた。

その後、58年に飯村小を分離したが、それでも1314名のマンモス校であり、その解消のため63年（1988）に二川南小を分離し、二川小学校は673名で新たなスタートを切ったのである。

現在創立134年にあたり、この間の卒業生は、16,839名を数えている。

《参考文献》

- ・二川小学校学校沿革誌
- ・PTA新聞「ふたがわ」

2 史跡と文化財

(1) 史跡

①古い区画の遺構

慶長6年(1601)、天下を統一した徳川家康は、東海道の集落に伝馬朱印状を下して宿駅に指定し、街道整備を進め、この地域に二川宿、大岩宿の2宿が誕生した。しかし、近接していたため、1644年に現在の地に二川宿として統合した。このため、東問屋場と西問屋場があった。今でも二川には、宿場であった頃の区画の遺構が残っており、全国的にも貴重なものである。

②枡形(新橋町・中町の2ヶ所)

宿場や城下町の出入り口で、道を真直ぐ進めないように左右に道をずらしたもの。軍事上の理由の他、大名行列の鉢合わせ防止などに用いられた。

③秋葉常夜灯

火防の神として古くからある秋葉山信仰の広がりによるもので、道標の役目をはたしていた。信仰や供養のため、人々が各地に灯笼を寄進したといわれる。秋葉常夜灯は二川八



幡神社内・北裏の瀬古道・中町にある。今でも住民の努力により灯されている。

④二川宿本陣資料館と本陣・旅籠屋清明屋

東海道筋に現存する貴重な二川宿馬場家本陣遺構を改修復元。新たに建設した土蔵風の資料館とともに「二川宿本陣資料館」として一般公開している。大名などの身分の高い人が宿泊・休憩した「上段の間」を始め、主家、中庭などが再現され、江戸時代の宿場の雰囲気を楽しむことができる。

二川宿本陣(旧東海道の本陣遺構は、滋賀県草津宿と二川宿の2つ。)

二川宿の本陣は、後藤五左衛門が中町の北側で営んでいたが、再々の火災のため没落し、寛政5年(1793)以降は紅林権左衛門に本

昭和30年3月1日、旧渥美郡二川町は豊橋市と合併しました。右の図はその頃の二川商店街の様子を覚えている方々からお聞きして作成しました。50年以上の昔へタイムトリップして頂ければ幸いです。なお、図中には正確ではない部分があるかも知れませんがご了承ください。ご協力頂きました方々には感謝を申し上げます。

N ↑

なつかしの二川商店街(昭和30年前後)

	夏目煎餅屋	朝倉ブリキ店	豊田自転車店	ときわ旅館	河合石油	なだみおでん屋	石川石油	稲垣八百屋	岩屋荘	旅館福聚亭		
岩屋	国道		新道(現立岩街道)									
	中村ガラス店	山六八百屋	田中建具店	南部タバコ店	吾妻亭	柴田駄菓子店	甲村床屋	現金屋	テラー彦坂	いもアメ加工所	横山花屋	指物屋

陣職を譲った。さらに、文化4年（1807）以後から駅制廃止の明治まで馬場彦十郎が現在地において本陣を経営した。



旅籠屋清明屋

江戸時代の庶民の宿となっていた旅籠屋「清明屋」は、江戸時代の庶民の旅の様子が分かるように展示が工夫されている。本陣と併せて見学することで当時の建築物のみならず、文化・生活を垣間見ることもできる。本陣と旅籠屋の両方が見られるのは全国でもここだけである。

二川宿本陣まつり「大名行列」

地元の二川宿本陣まつり実行委員会が中心となって、平成3年から毎年11月の第2日曜日に旧東海道で「大名行列」を開催している。

⑤脇本陣跡

脇本陣は本陣の利用が重なった場合、その補助的な役割を果たした。二川宿の脇本陣は松坂家がつとめていた。今では建物は現存していないが、脇本陣の建物は間口7間（約13m）、奥行19間（約35m）、畳数は93畳だった。

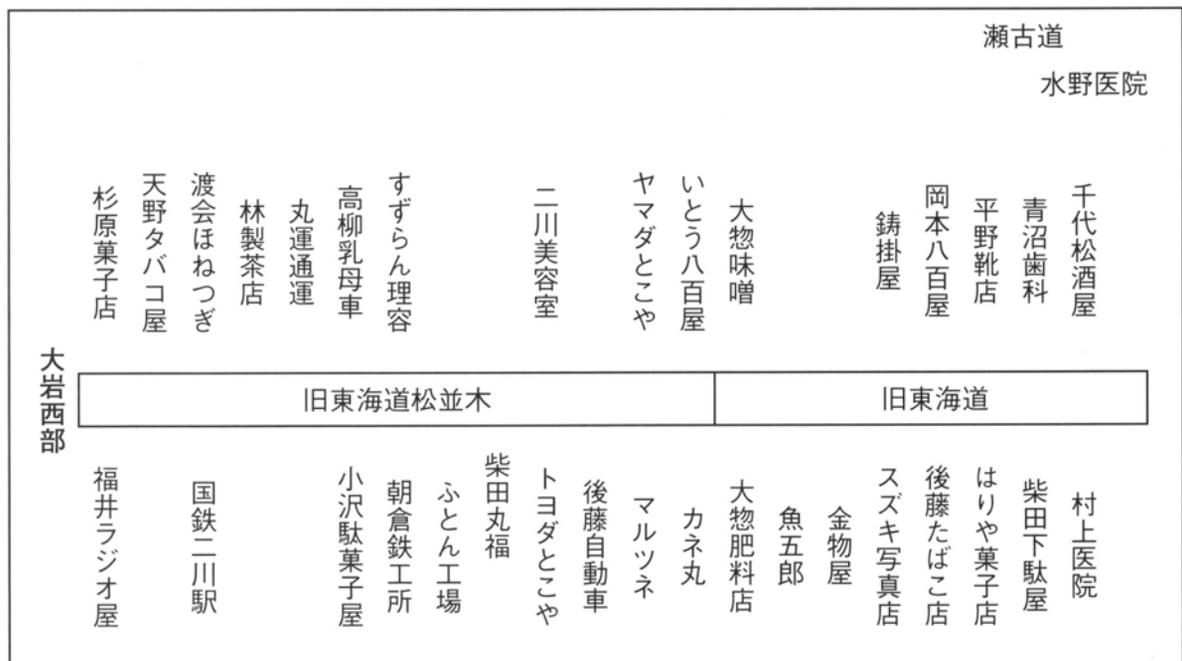
⑥駒屋

旧商家「駒屋」は、旧東海道に面して、文化11年（1814）建築された主屋、明治11年に建った通用門が現存している。南土蔵、北土蔵、北倉のほか茶室、離れ座敷などが残され、商家としては市内最古であり、貴重な建築物であるため市の有形文化財となっている。

平成15年4月豊橋市の所有となり、今後は、歴史的な建築物として公開の予定である。

⑦道標

- ・渥美郡奥郡道標は、田原や伊良湖へ続く道の道標として明治33年(1900)に建てられた。
- ・岩屋江八丁道標は、三河国三十三霊場の二番札所岩屋観音への道標として弘化4年(1847)に建てられた。当時は、火打坂付近にあったといわれる。





- ・二川町道路元標は、中町にある秋葉常夜灯・高札場跡の隣にある。
- ・東町の一里塚は、現在遺構はないが、江戸日本橋より数えて72番目のものだった。

⑧製糸工場の跡

二川地区は、明治から大正にかけて中小の30を超える工場群があり、製糸産業が盛んだった。特に小淵志ちが手がけた玉糸製糸は、製糸産業地帯として、豊橋地方を全国のトップレベルへと導いた。最盛期の大正時代は、多くの女工さんが三遠地方から働きに来ていた。二川にはボイラーを製作する会社があるが、明治後期に製糸の大量生産を可能とする熱源を機械化したボイラーに頼るようになった経緯からであるといわれている。

⑨北山戦争遺跡（塹壕）とトーチカ跡

太平洋戦争の終結間際に、アメリカ軍による遠州灘沖からの攻撃あるいは上陸を阻止す

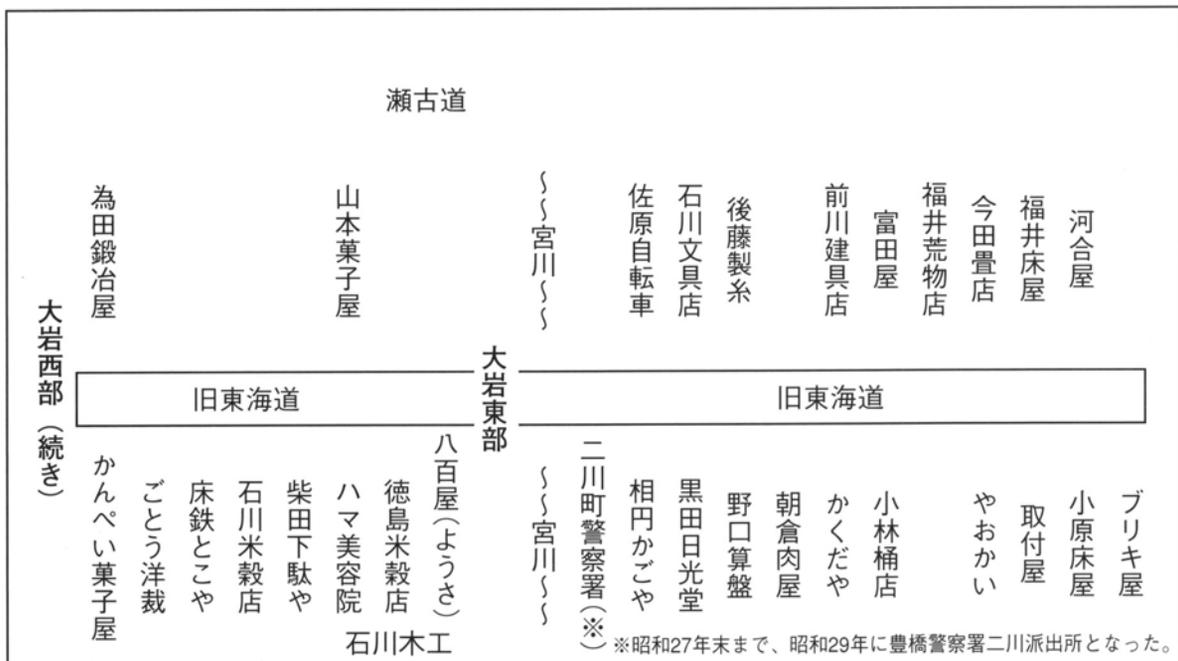
るため、怒部隊が二川に駐屯した。今でも、松明峠付近には怒部隊の司令室跡や防空壕、補給路などが現存している。また、二川駅の北側にはトーチカが構築されており、今でも駅から見ることができる。これらは、太平洋戦争の実態を学ぶための貴重な教材にもなっている。

(2) 神社と寺院

①二川八幡神社

永仁3年（1295）鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮から勧請したと伝えられる二川宿の氏神である。祭神は「応神天皇」で境内には、若宮神社・三峯神社・津島神社・稲荷神社・護国神社の社があり、毎月第1日曜日に月次祭がある。

境内には宿内の人々の寄進による灯籠が今も残っている。宿内の新橋町枅形南にあった、文化6年（1809）建立の秋葉山常夜灯も移設されている。また、昭和15年に榊を植樹した際、柵に桜の杭を使用し、杭の1本から芽生えて生育した逆桜と名付けられた桜がある。



・八幡神社祭礼

毎年10月の第2日曜日に本祭（前日は宵祭り）があり、江戸時代の末期から続いているといわれる神輿渡御がある。御神体を載せた御神輿が、70余人の従者及び3台の山車を従えて町内に繰り出す。太平洋戦争の中期以降一時中断したが、戦後復活し今日に至っている。

また、中町の山車のからくりは「和藤内とぼたん」、新橋町は「小野道風と蛙」、東町は「うさぎの餅つき」であり、この3台を夜6時半ごろ町内で曳き回す際には、仮装した若者たちがハンカチ・お餅等を撒きながら笛や太鼓を賑やかに奏でる。

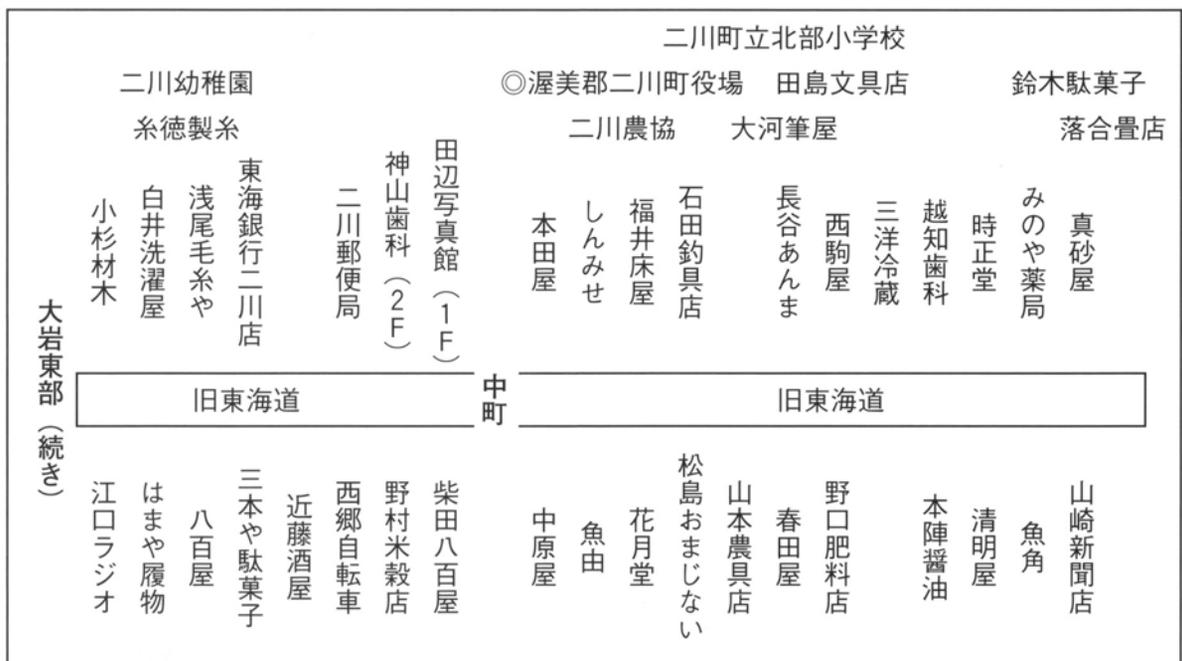


②大岩神明宮



社伝によれば、文武2年（698）岩屋山南に勧請したのが最初で、のち保延元年（1135）大岩村が本郷に移ったときに遷宮し、天正11年（1583）元屋敷に移り、さらに正保元年（1644）、大岩村の移村とともに現在地に移ったとされている。江戸時代には、黒印地2石を受け、その格式はかなり高いものだった。

祭神は「天照大神」で境内には、金比羅神社・津島神社・御霊神社・秋葉神社などの社があり、毎月第1日曜日に月次祭がある。現在では大岩の氏神となっている。境内には寛延4年（1751）の燈籠、文化4年（1807）の秋葉山常夜燈、文政6年（1823）の手水鉢がある。



祭礼は、毎年10月の第2土曜日に宵祭がある。御神楽奉納、若連寸劇、手筒花火奉納などがあり、夜店も賑わう。翌日の本祭には子供神輿、餅投げなどがある。

③白山神社



神社の創立年代は不詳であるが、鎌倉時代に大脇庄（大脇新田とも称す）として雲谷村より分村した時、神社を勧請したといわれている。当初唐沢宮とも称し、のちに現在地に遷宮した。祭神は「菊理姫命」などで境内には秋葉神社・御霊神社の社がある。秋祭りは、毎年10月の第2土曜日に宵祭があり、幹澤連の若者がバザーによる出店や、餅投げ、甘酒を振舞う。平成12年には、遠州豊田（現磐田市）より山車を譲り受けた。この縁でお互い

の祭りに町内の有志が参加している。また、春には手筒花火を奉納する。

④二川稲荷（伏見稲荷）

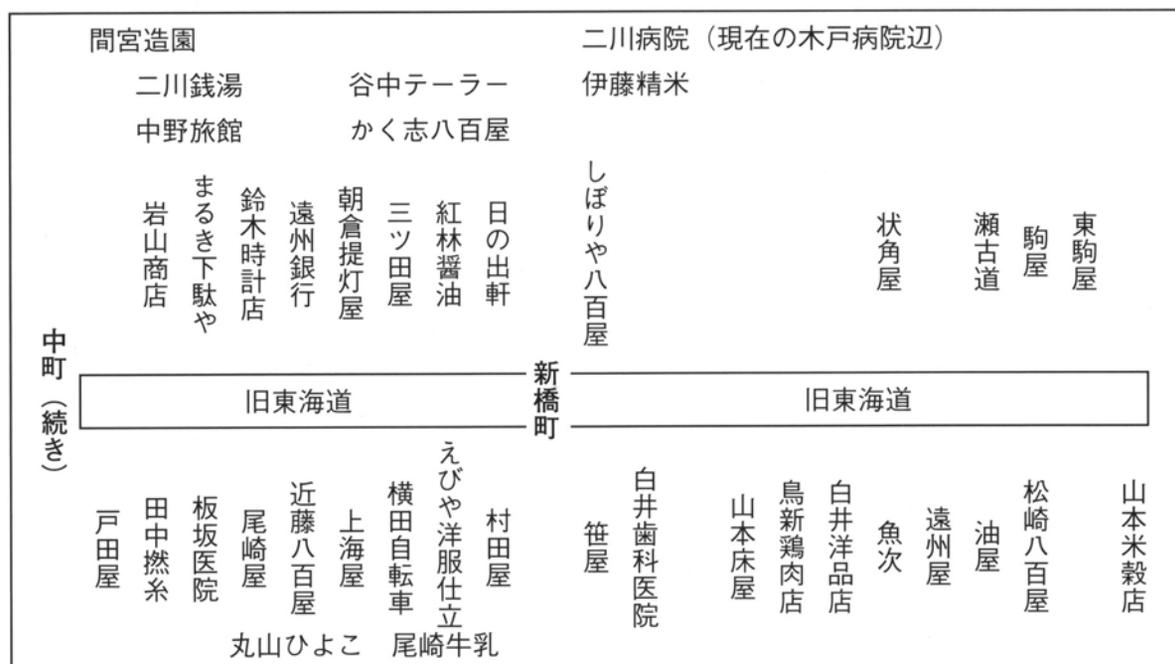
明治43年に豊橋で京都の伏見稲荷を信仰とする神道社として設立され、昭和2年に現在地に移った。境内には神殿をはじめ伏見会館、お山巡拝路などがある。御衣黄桜ぎょいこうざくらの開花期は4月中旬で、サトザクラ系に属し、珍しい黄緑色の八重の花を咲かす。一説によると、江戸時代初期に京都の仁和寺で栽培されたのが始まりといわれる。花卉に葉緑体や気孔があり、大変個性豊かな桜である。他に八重桜などもあり、花見見物の人たちで賑わう。

⑤伊寶石神社（いぼいしじんじゃ）

天正15年（1587）、大岩村の大石新左衛門いぼいしが、疣石本社を建てた。社殿裏の巨岩にたまる霊水が疣（いぼ）をとるのに効果があるといわれ、昔から慕われている。ここの境内を二川自然歩道が通っている。

⑥山住神社

戦後に水窪・山住神社の末社として、地元の有志により二川町南裏に建てられた。大山住の神を祭っている。



⑦十王院

本寺を竜拈寺として、天正13年（1585）開山された十王院には、二川村開山の碑がある。元禄4年（1691）の寺社改により、松音寺とともに本山を永平寺、中本山を白須賀藏法寺とする末寺となった。

⑧妙泉寺

貞和年間（1345～50）に日台上人が建てた小庵だった。万治3年（1660）現在地に移転して山号を延龍山と改めたといわれる。

春には、境内にある春乙桜と名づけられた桜が見事に咲く。寺境内に、寛政10年（1798）に建立され、明治12年（1879）に隣の十王院から移設された芭蕉句碑「紫陽花塚」があり、「あちさるや藪を小庭の別座敷」（芭蕉の句）と歌われている。



寺には、暑気払と健康を願う、ほうろく灸の加持が伝わっており、夏の土用の丑の頃になるとほうろくを頭に載せてお灸をすえる行

事が催される。

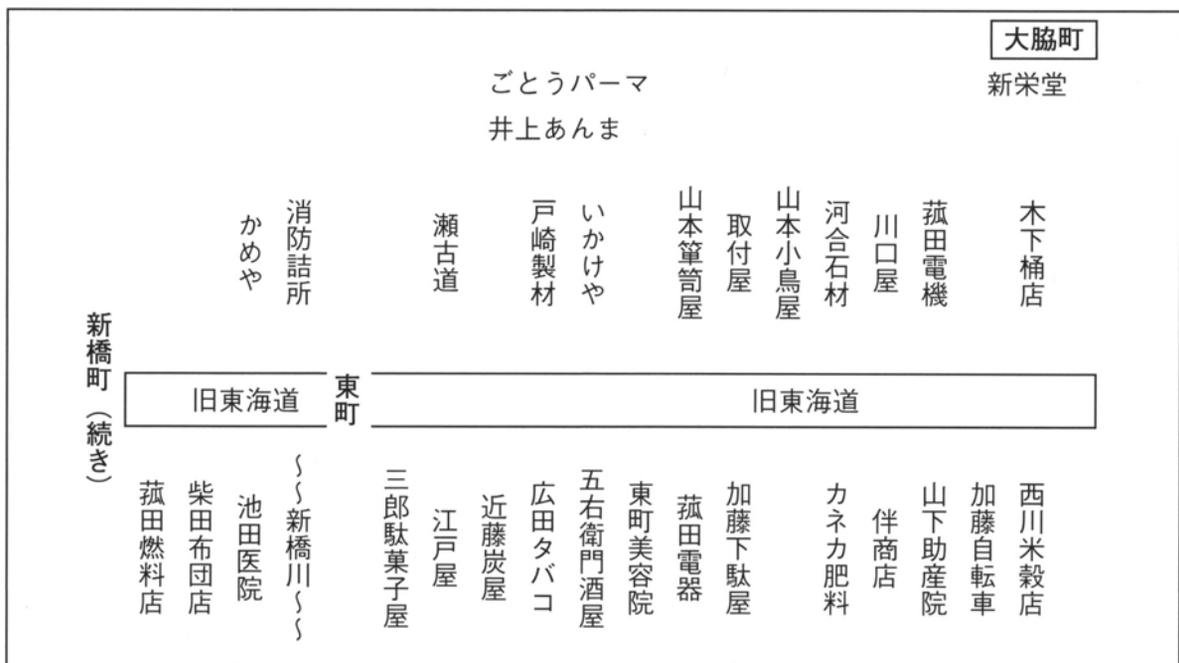
⑨松音寺



康永～貞和年間（1342～50）の創建と伝えられ、明暦年間（1655～58）に遠州白須賀の藏法寺香外養薫和尚により再興された。江戸時代、大通行の際の休泊所や、本陣からの避難所に指定されていた。また、幕末の頃に、全久院（現在の豊橋市東田町）から松音寺に隠居した田牛和尚は、寺子屋を開いて周辺子弟の教育にあたる一方、旧田原藩の渡辺小華に絵画を学んだ南画家でもあった。

⑩大岩寺

もとは岩屋山麓にあって、岩屋観音に奉仕した6坊の1つだった。元和8年（1622）遠州浜名郡宿芦寺の通山和尚により再興され曹



洞宗に改宗。のち正保元年（1644）現在地に移転した。岩屋観音堂に寄進された文化財は、当寺に所蔵されている。宝塚歌劇の白井鐵造作「すみれの花咲く頃」の歌碑が二川バイパス北側の寺所有地にある。

①岩屋観音堂

天平2年（730）行基がこの地におもむいたとき、風景の美しさに魅せられて千手観音像を刻み、岩穴に安置したのが起源といわれる。

江戸時代には街道を行き交う旅人から多くの信仰を集めたといわれる。特に、備前岡山藩主池田綱政は信仰が厚く、黄金灯籠・絵馬（ともに市指定文化財）・手水鉢等を寄進した。



(3) 自然

①二川自然歩道

平成12年に二川自然歩道として整備され、JR二川駅前の信号交差点の角に「二川自然歩道」の標識柱がみえる。駅北口から二川バイパスに向かうとT字路となり、横断して右のコンビニ付近に標識柱がある。坂を上ると伊寶石神社の横に「豊橋自然歩道」の案内板が見える。登山口へは左手を迂回するか、この神社の境内を歩けば辿り着く。コースは尾根に向かってゆるやかな斜面が続いており、尾根に出た所に二川自然歩道の道標がある。ここから稗山（松明峠）まで尾根道を歩くと、



JR二川駅前の信号交差点の角に「二川自然歩道」の標識柱がみえる。駅北口から二川バイ

頂上までは雑木林となっている。そして30分余り歩くと階段になり、階段を登りきったところが東山の頂上である。

さらに東方のNHK二川中継所近くの尾根には3月下旬カタクリの花の群生がみられる。

②豊橋健康の道（二川地区）

平成17年11月開設した豊橋健康の道は、総合動植物公園を起点とした次の3コース。

- ・二川宿歴史文化コース（4.3km、約1時間10分、本陣資料館、旧東海道の街並み）
- ・岩屋展望コース（4.7km、約1時間20分）
- ・里山森林浴コース（7.8km、約2時間、自然の山道が体験でき、豊橋の市街地なども展望できる。）

豊橋市は平成5年から、「歩くことは健康づくりの基本」と位置付け、健康の道づくりを進めた。これまでに向山、万場レイク（調整池）など



7コースがあるので、二川3コースを加えると計10コースとなった。

③豊橋市視聴覚教育センター・地下資源館

プラネタリウムを始めとして、地下資源に関する資料や本物の鉱物が展示されている教育施設である。

④岩屋緑地

大蔵山の山頂にある展望台は、湖西方面、田原の蔵王山や三河湾、豊橋市街地が一望でき、風力発電の円形風車もある。岩屋緑地内には、平成17年に開設された休憩所施設、散策道などがあり、里山として市民の憩いの場となっている。

春には桜祭りがあり、眼下に広がる桜は見事である。山頂近くに大きなフィールドアスレチックが設置されており、休日には家族



連れの憩いの場となっている。

グリーンスポーツセンターには、パター

ゴルフ、テニスコート、フィールドアスレックス、ランニングコースなどの施設があり、岩屋観音への登山通路もある。

⑤火打坂

東海道が飯村方面へ向う坂のあたりは、当時火打ち石に使える硬いチャートが多いことからこの名が付いたとされる。江戸時代には追いはぎが多かったとされ、松明峠から烽火を上げた山賊もいたという。この東側にはチャンチャカ山の古墳があったが、農地などで開発されたため今は見当たらない。明治になって、天皇の東上にあわせ多くの侍従が伴う馬での通行は困難と判断した政府は、迂回のため岩屋下の道を整備した。

⑥梅田川の堤防の桜並木と橋

二川駅南口から東方向に続く梅田川の堤防には桜並木があり、4月の初め頃、一斉に桜の花が満開となり、菜の花とともにかぐわし



き故郷の風景が醸し出される。

この美しい水辺を守ろうと平成9年より毎

年9月下旬に、近隣校区住民、企業が参加して、豊橋市・湖西市の協力の下「梅田川ふれあいクリーン作戦」が開催されている。

二川駅南口の付近から東の方向に、桜橋、西の川橋、大岩橋（三味橋）、十七疋橋、高橋、道賢田橋、筋違橋などの橋が続いている。

(4) 今に伝わる昔話

①岩屋の千手観音

天平2年(729)行基上人が全国を旅をしている途中、岩屋山をたいそう気に入り小屋を建てたといわれている。また、一心にお経を読んでいるうちに心に強く感じた岩山に十一面千手観世音菩薩を刻んだといわれている。近くに亀見山岩屋堂を建てて祭った。お寺は、大岩寺始め6つできた。

②観音様のお告げ

宝永4年(1707)岡山藩主池田綱政は、江戸から国元へ帰る途中、静岡県白須賀宿に泊まった。その夜のこと、綱政の夢の中に岩屋の観音さまが現れて、「綱政よ、今夜遅く大津波が押寄せてくるから、早く立ち去るがよい。」と告げた。綱政は、日ごろから厚く信仰している岩屋の観音様のありがたい「お告げ」だと思い、家来とともに二川宿へ向かった。その夜、大津波は白須賀宿を襲い、被害は、甚大で目をおおうばかりだった。

綱政は、あやうく大津波の難をのがれることができたため、ますます岩屋の観音さまを深く信仰するようになったといわれている。綱政は、このときのお礼として観音経、絵馬、黄金灯笼などを寄進している。

③岩屋山のぬれ仏

1765年、豊川に架かっている吉田大橋が古くなったので、架け替えることになった。幕府の命令を受けた江戸下谷の大工の茂平が弟子の善右衛門をつれて、吉田の宿に来た。そして、橋をつくり始めたが、なかなか難しくて工事が進まず困り果てていた。そこで、岩屋の観音様におすがりするほかないと考えて、2人は観音堂に入り、橋が完成するようにお祈りをした。

7日目の夜になって、観音様のお告げがあり、見事、橋をかけることができたといわれている。江戸に帰った2人は、これも観音様

のおかげであると、早速、高さ3mほどの銅
でできたぬれ仏を岩屋山頂に祀った。



④チャンチャカ山（大岩）

二川駅北側に、戦中に築かれた大きなトーチカ跡が今もあるが、昔、この辺りは山になっていて、「チャンチャカ山」と呼ばれていた。昔の人は、大風が吹くと、「それ、風の神がお怒りになったのではないかと、恐れた。悪い病気が流行ると、「それ、疫病神やくびょうがみがきたぞ」と怖がった。あるとき「風の神を追い払おう、そして山に閉じこめよう」と白い着物を着て、笹をもった人を先頭に、チャンチャカ、チャンチャカ、拍子木をたたきながら、風の中を北の山へ行った。悪い病気が流行るときも、同じように拍子木をたたいた。そして、その山をいつしか「チャンチャカ山」と呼ぶようになったといわれる。

⑤十七疋町と十七疋橋

正保元年（1644）二川宿が大岩と合宿したとき、二川村の土地が大岩村の土地まで入り込んだため話し合いで二川村が土地をもらう代わりに、お役を余分に持つこととなった。宿場にはどこも馬100疋、人足100人といったお役が決まっていた。大岩と二川で1つの宿場となったのであるが、二川の一部が大岩の区域に入ったため17疋余分に負担することとなり、この入り組んだ所を「十七疋町」という地名で呼ばれるようになり、橋にも「じゅうしちひき」という名が残っている。



⑥般若坂

東町から大脇に行く途中に坂がある。この坂はかつては、もう少し急な坂道のようなだった。荷車を引く人は、歯をくいしばり、顔を真っ赤にして力を込めながら引いて登っていた。その顔が、丁度般若のように見えたので、誰言うともなく、般若坂といわれるようになった。また、昔のこの辺りは家もなく、木が生い茂り、夜などは真っ暗となり、時折鳥の鳴き声が聞こえる程度で気味の悪い所だった。たまに人が通ると、般若の顔をした化け猫が現れ、驚かされるという言い伝えから、この名がついたともいわれる。

3 人物

(1) 二川を開いた人々

人々が今の二川の地に住むようになったのは、これまでも触れられたように1644年といわれている。その頃、この辺りは、大小の松、竹などの樹木が生い茂る荒地であったと思われる。

戦国時代の終わりごろ、三ツ家（元々は三ツ谷といわれた）のあたりに尾張の織田家に仕えていた後藤四郎左衛門という武士が住み始めたといわれている。

四郎左衛門は、土地の開墾を始めて田畑や道をつくり、村を形成したようである。彼の子は源之丞で、孫は源吾であるが、源吾のときには、東海道が全国的に整備されつつあり人々の往来も増え、旧の街道から東海道へ流れる

ようになった。このようなことは、大岩の前身である本郷の村でも起こっていた。こうした経緯の中で、それぞれの村は東海道沿いであるそれぞれの元屋敷の地に移ることとなった。

大岩村では、中心となって村の引越しの指



導をしたのは、後藤七郎左衛門らである。また、三ツ家では、源吾であったといわれている。二川村が旅人の世話や畑仕事により豊かになったのも源吾のお

かげだということで、源吾坂の名がつけられたといわれている。

二川村・大岩村は、それぞれ元屋敷といわれる場所に40～50年あったとされている。源吾の養子が源太夫（八名郡賀茂の出身といわれる）で、その子である源右衛門は、村の人たちの進言もあり、二川村を開いた恩人として祖父の源吾を祭るため寛永9年（1632年）に石碑を建てた。この石碑は、今も東町の十王院にある。石碑には「三州二川村新町之開山一翁善得」、「天正十三年霜月吉日」などがある。碑には一翁善得（源吾の戒名）の名とともに後藤源右衛門の名も記されている。

慶長6年（1601）、東海道の伝馬制度が敷かれるようになると二川村、大岩村の2村で一つの「宿」の役割を果たした。その後、両村は合宿し、正保元年（1644）、現在のところに移った。

二川村では、源右衛門が宿の世話役を引き受けた。その後、子の五左衛門から代々五左衛門を名乗り、150年近く本陣を運営したようである。そして、紅林家・馬場家と受け継がれた。

大岩村では、世話役を後藤七郎左衛門が引き受け、代々七郎左衛門の名を継いで230年余り問屋をしていたようである。

(2) 小淵志ち



製糸業の発展を個別にみると、上細谷の朝倉仁右衛門は、明治6年桑苗の栽培に成果を挙げたものの、自ら興した座繰製糸は失敗をしてい

た。その後、試行錯誤を重ね明治15年本格的な器械製糸工場である細谷製糸工場を設立した。この工場から育つた前田伝次郎、大林卯吉は独立し、蚕都豊橋の礎を築いた。蚕都豊橋を支えたものは玉糸製糸であり、これを発展させた人が小淵志ちであり、二川を全国有数の製糸産業の地とした。しかし、それは苦労の連続であり、一方で偶然も重なった。

小淵志ちは、弘化4年（1847）群馬県富士見村の貧農に生まれ、寺子屋にも行けず、7、8歳ごろから田畑に出て、父や母の手助けをした。また、母に糸の取り方を教えてもらい、小さい時から繰糸をして家計を助けていた。蚕が盛んだった前橋の製糸家の工場に住込みをして、製糸の知識を得た。前橋に行ったときも、糸の取り方、まゆの買い方、糸の見分け方など、一心に覚えたという。朝は誰よりも早く起き、仕事は誰よりも熱心にした。1年経ったときには、工場主から給金を倍にするからと引き止められたといわれるが、家に戻った。しかし、貧しさには変わりはなかった。明治12年の春、夫徳次郎と2人でお伊勢参りに出かけた。その途中、遠州で製糸業に従事するも、田原に良質のまゆがあると聞き、一夜の宿を二川の橋本屋にとることとなった。この頃の三河地方は、度々の飢饉により生活が貧しかったといわれる。その上、蚕を飼っても、糸の採り方を知らないため、まゆは安い価格で他所へ売られていた状況だった。

宿の主人が志ちの養蚕製糸に興味を抱き、

ぜひ教えてくれないかと熱心に頼み込んだ。志ちもその熱心さに動かされて、少しの間教えようという気になったといわれる。地元の有志ものちに志ちを招いて養蚕製糸の技術を学んだ。こうした二川の有志の誘いに心を動かされ、製糸工場を開くこととなった。始めは、裏長屋を改造して工場とした。糸取りの道具がなく、指物屋にお願いをして座繰式のもので始めた。少しの間が次第に数年が経ち工場は大きくなった。しかし、明治19年夫徳次郎が病気で亡くなるという不運があった。悲しみのなか、大岩村に製糸工場を建設、糸徳製糸工場と命名した。



蚕糸は1匹の蚕（かいこ）がつくる1つのまゆ繊維から取られるが、2匹の蚕がつくる玉まゆ繊維は質が落ちるとされていたため、くずまゆとされた。志ちは、くずまゆから糸が取れば、安く入手でき、製糸業も発展するであろうと考え、苦労の末玉まゆから玉糸をとることに成功した。そして明治25年（1892）全国で初めて玉糸工場を建設した。当時では画期的なことであり、この後、二川に製糸家が増え、技術も進歩して、販路が拡大していった。

小淵志ちは、寺子屋へも行けなかったため、文字はほとんど知らなかった。生活も質素で千人を擁する大工場主となっても、食べ物は女工さんと同じものを食べた。朝早く起き、糸くずを集めて丁寧に結んだり、反物として年季奉公あけの女工さんに贈ったりしたといわれる。大正4年、全国で女性として初めて天皇からお褒めを受け、産業功労賞をはじめ色々な賞を受けた。

(3) 田村憲造と田村善藏

田村憲造は明治22年（1889）渥美郡二川村

の駒屋に生まれた。田村家は、江戸時代には代々医師の家庭だったが、医師として苦労があった5代目隆節の遺言により商家となり、宿内で有力者の家であった。

幼少のころから絵画と書に優れていた。満5歳になったとき、当時の大川尋常高等小学校に早期入学したが、教科書を全て覚えていたといわれる。成績も優秀で明治34年（1901）卒業した。5代目の遺言に反し、医師になろうと志を立て、叔父や母に相談して許しを得たうえで東京の独逸学協会学校へ入学した。特に、母親のすがは、積極的に応援をしてくれた。

13歳のころから小野湖山宅に身を寄せて勉学に励み、第一高等学校・東京帝国大学医学科に進んだ。大正3年（1914）優秀な成績で卒業して医療内科に入局し、恩賜の銀時計を頂いた。基礎分野に移り、もっと薬学の研究がしたいと青山教授に申し出たところ、薬物学教室の林春雄教授を紹介された。薬物学教室に移った憲造は研究に没頭することができた。大正9年（1920）から翌年にかけて、欧米へ留学した。帰国後、助教授、大正13年には教授となり、母校の大学で教鞭を揮った。大学で学生を教える傍ら、薬学の研究をした。

特に、ビタカンファーを生成したことは、余りにも有名である。カンファーとは樟腦のことでクスノキの根や葉、枝などを蒸したり煮たりすると蒸気が発生し、それを冷やして精製するとできる。それを強心剤として生成したものがビタカンファーである。また、「樟腦の強心作用の本態」に関する研究に対して学士院賞を授与された。ビタカンファーによる利潤は、日本薬理研究会を誕生させ、多くの薬理に対する研究助成を行った。

病気となり、昭和19年（1944）疎開を兼ねて、故郷の二川町へ帰り、その後退官した。自宅の隠居所を改造して研究室にし、「病中

のオモチャ」と称してここで病氣療養かたがた薬学の研究を続けた。

憲造は、大学教授時代、言い出すと自説を崩さない性分で、学生からは「タイラント（カミナリ教授という意味）」というニックネームをもらったそうだ。昭和28年（1953）に64歳で生涯を閉じた。

田村憲造の長男善藏（東京大学名誉教授）はスモン病の原因がキノホルムであることを突き止めた人である。父から「薬学に行って医者を助けるように」と常々言われていた。また、そうしたことが善藏の薬学を志す動機となり、スモン病の研究をすすめ、キノホルムが原因であることを発見した。やがて、厚生省がキノホルムの製造中止、使用禁止の行政措置をとった。

4 二川の風景と移り変わり

(1) 道路について

昭和22、3年に梅田川の河川改修があり、その土砂を国道1号線の道路改修工事の時にひいたとされる。この頃、自動車は非常に少ない状況だった。昭和25年には、青年団による交通量の調査があったといわれ、国道が舗装されていなかったため、車が通過するたびに砂埃が舞ったのでこの調査はきつかったという。

国土交通省名古屋国道事務所などによると、二川地区の国道が舗装されたのは、はっきりした記録はないものの昭和30年頃とのこと。従来旧東海道を通過していた国道1号線が、昭和4年に梅田川南側に新設され、正式に今のルートとして位置づけられたのは昭和33年頃といわれる。また、久保田の跨線橋については昭和4年（1929）に幅11m長さ15mのものが架かったのが最初で、昭和36年（1961）新幹線を越えるために拡幅（幅12.5m長さ20m）された。その後、昭和55年（1980）下

り線側に架橋（幅10.2m長さ77.5m）がなされ、昭和57年（1982）国道1号線の4車線化が実現した。

旧東海道の二川駅前通の松並木は、昭和35年頃、モーターレーゼーションが始まり、車道拡幅のため松並木が撤去されたようである。旧道沿いには、まだ格子戸の家が続き、街道の風景があった。松並木は国道1号線源吾坂付近にもみられた。

国鉄バス（現JR東海バス）と遠州鉄道のバスが狭い町中を走っていた。昭和47年になると主要地方道豊橋湖西線（二川バイパス）が開通した。

(2) 二川交番の歴史

豊橋警察署などによると、今の二川交番の前身は二川地区に明治9年12月第四方面出張所警察として誕生した。明治10年2月に豊橋警察署二川分署、昭和24年4月1日に渥美郡二川町警察署大岩・二川両巡査駐在所となった。（二川警察署は昭和27年12月31日に廃止）

昭和28年1月1日に国家地方警察渥美地区警察署二川巡査駐在所となり、昭和29年7月1日に警察法改正により、豊橋警察署に編入され、警部派出所（巡査派出所併置）となる。昭和31年7月1日に豊橋警察署二川警部補派出所（巡査派出所併置）となる。

昭和51年12月7日に新築し現在の建物になる。昭和52年4月1日、豊橋警察署二川派出所となる。平成9年には、愛知県警からベスト交番賞を受賞している。

(3) 二川駅の今昔

明治29年東海道本線二川駅が誕生し、新たな時代へと変化していった。しかし、この駅誕生には住民や既存の交通運輸業者の反対に遭って延び延びとなり、そのうえ、駅舎は中心部をかなりはずれたところに建った。

旧駅舎（木造平屋建て252.5㎡）は、平成12年に新駅舎を建設するために解体されるまでは、東海道本線100余ある駅のなかで最古参だった。平成14年2月に旧二川駅舎は百余年の歴史を終えて新たに橋上駅となり、南北自由通路が完成したことで二川南地区、豊橋総合動植物公園へのアクセスが容易となった。この過程で本郷遺跡は発掘された。

また、宗川元章氏著「故郷の街とよはし」によれば、二川駅で発生した次のような出来事が伝えられている。

昭和30年1月22日13:44浜松発豊橋行下り列車から父子が下車した。その子は、父より先に駆け出し線路を渡ろうとしたが、この時、上り貨物列車が迫る。踏切で誘導していた当時41歳の駅長は、身の危険もかえりみず、男の子を救うため線路へ飛び込んだ。しかし、非情にも2人の命が失われた。

この駅長の殉職を機に、同年プラットホームを結ぶ陸橋が造られた。しかし、これはもともとあったものが、太平洋戦争中に金属回収で撤去されたままになっていたもので、この事故は戦争が生んだものともいえよう。

(4) 映画館について

戦前、新橋町にあった二川座では、芝居や映画が上演されていたといわれる。大正期から昭和の初めまで、「二川座」という無声映画館があった。現在では、東駒屋の近くに竹に覆われたコンクリートの台座のみを残しており、当時の隆盛を僅かに留めている。

また、昭和34年（1959）10月には、本格的なトーキー映画として「銀映」（席数450）ができた。当時は、渥美郡内、南栄、鷺津方面からのお客さんを含めて、大盛況だったといわれている。館内にはコンドーパンの売店もあった。その後、席数200に改造し、パチンコ店、フードセンター、薬局を併設し、映画

は昭和45年頃まで続けられた。今も倉庫として銀幕部分が残っている。

また、明治時代末から大正時代中頃まで梅田川の高橋近くに戸田源蔵という人が「新富座」という芝居小屋をつくり、人気があったといわれる。二川八幡社には、昭和初期まで「乾澤座」という回転舞台があり、祭りのときに芝居を上演しては賑わいを見せていた。

(5) 二川の商店街について

豊橋市内の郊外型ショッピングセンターのさきがけとなった二川ショッピングセンターレマン（鉄骨2階建て、建坪ショッピングセンター部分2,023㎡、食堂ビル街290㎡、延べ面積3,300㎡）は、昭和47年（1972）4月5日オープンした。豊橋、豊川、浜松地方の19店が衣料品、家庭用品、食料品を扱っていた。入店していた店は、メザックマルイ（現ヤマナカ）、豊電舎、イシグロ、ミカド運動具店、ヤマト楽器、精文館書店、時正堂、マスヤ、大丸カーテン、三豊マルイ、マルイ、松月堂、甘美堂、堀内カメラ、イイダトーイなどで、味ののれん街は、東京庵、榎金（その後桃苑）、三友軒、松屋などであった。しかし、ヤマナカを中心としたショッピング部門は、平成5年2月14日の火災により閉店した。のれん街は、平成13年1月30日閉店となった。その後、平成7年にヤマナカは岩屋下にアルテ二川としてオープンし、平成17年10月二川フランチ館と名称変更した。

一方、二川地区の商店で構成していた東部商業者協同組合では、二川地区商店街でさくらシールを作成した。商品を購入した際加盟店にて、台紙1枚（シール200枚）に対し200円相当の商品と交換するか、二川小学校運動場で催された、真夏の盆踊りと縁日で希望の商品と交換していた。このさくらシールも平成7年ごろには発行されなくなった。

編集後記

平成17年3月、第1回編集委員会を開催し、それ以後、30回の会合を重ねてようやく原稿をまとめあげることができました。微力ながらも編集委員、執筆委員の共同作業により原稿執筆そして検討の繰り返しを続けてきました。

校区史編集に当っては、中学生が読める程度の内容にすること、そしてページ数の関係でごく限られた内容しか記述することができませんでした。また、複数の執筆者の記述により文体の不統一があることをお詫びいたします。

校区の皆様が、過去の歴史を学ぶことにより、未来に生きる知恵となり、気力あふれる生活を営むことができるよう願っています。

最後になりましたが刊行にあたり、株式会社豊橋印刷社のご指導・ご協力を受けました。ここに記してお礼申し上げます。

編集委員会

委員長	西郷 隆一
副委員長	谷口 幸市
副委員長	笹瀬 清次
委員 (執筆)	山本 久明
委員 (執筆)	佐藤 省司
委員 (執筆)	安村 信弘
委員 (執筆)	牧野 敏夫
委員	加藤 修一
委員	山本 啓
委員	石井 大造

協力者

後藤 恒夫	西川 収示
大澤 重明	後藤 宣之
山本 忠義	後藤 多弘
為田 一之	大河内教世
菰田 博	鈴木 佳也
高橋 正一	梅田 定雄
山本 武志	井上 計
山谷 忠義	深沢 渡

参考文献

二川～水と緑と歴史のまち	市	1985
とよはしの歴史	市	1996
豊橋の史跡と文化財	市教委	1998
二川・大岩地区まちづくり計画	市	2002
二川風土記	那賀山乙巳文	1971
豊橋市制八十年史	市	1986
二川区有文書	二川宿本陣資料館	1994
ふたがわ	二川小学校	1964・1987
東海道二川宿の研究	紅林太郎	1981
東海道五十三次を歩く	児玉幸多	1999
小淵志ちと女工の生活	豊田清子	1982
私の思い出故郷の街とよはし	宗川元章	1991
郷土豊橋を築いた先覚者たち	市教委	1986
糸の町	橋山徳一	1990
教育と文化 77号	小林一弘	2005
東海道五十三次宿場展 XI	二川宿本陣資料館	2001
二川宿古写真展	二川宿本陣資料館	1996

校区のあゆみ 二川

平成18年12月25日発行

編集 二川校区総代会
二川校区史編集委員会
発行 豊橋市総代会
印刷 共和印刷株式会社

R2100

環境にやさしい100%の再生紙を使用しています。

PRINTED WITH
SOY INK

